

---

# 魔法少女リリカルなのは × Silver eyes

舞台裏の黒衣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはxSilver eyes

### 【Nコード】

N6370X

### 【作者名】

舞台裏の黒衣

### 【あらすじ】

異端のデバイスは夢を見る。それはとある少女の夢。異端のデバイスは少女と出会う。それがきつと、彼の始まり。

のんびりするのが大好きで、軽く対人恐怖症で、需要があるのかわからないツンデレ？という成分の持ち主。そんな彼が出会うのは一人の少女。彼女と触れ合う事で変わっていく彼の中のナニカ。少女との日々で彼が手に入れるものは平穏か、それとも波乱の日々か。だがそんなことよりのんびりしたい（by 主人公）

夢の中で出会う少女。それは彼に一体どんな影響を及ぼすのか。そして彼は少女と共に何をなしていくのだろうか。

ところで夢の中で寝るってのはどう思う？（by 主人公）

無駄に高性能？だけどデバイスらしからぬ主人公と、少年、少女らを中心に

ほのぼのなストーリーを描けるといいな（切実

## 第一話 『始まり』（前書き）

こんにちは、こんばんわ、おはようございます。

この度読者＋執筆者へとなることを決意した新参者です。

初めて小説の投稿となりますので、拙い表現、文章が目立つかと思われます。

また、仕事や趣味のため、不定期更新になると思われますが、地道にこつこつと頑張っていきたいと思えます。

どうか宜しく願います。> ( | | ) <

## 第一話 『始まり』

新暦61年 12月21日 海鳴臨界公園

冬真っ只中な寒気が厳しいこの季節。辺りは夕日に包まれ、オレンジ色に染まる公園

その公園の中にあるベンチに栗色の髪をした一人の少女が座っている。しかし少女は遊んでいる様子でもなく、ただ俯いて力なく座っているだけ

いや

少女は泣いていた。声を押し殺して

傍目からはただ座っているようにしか見えないが、時折震える体と、小さな、本当に小さな泣き声が時折聞こえてくる

時間故にか周囲に人影は見られず、その少女に気付く人は居なかった

そう、人は、居なかった

「ふえ？」

不意に、俯いていた少女が顔を上げる

その目には大きく涙が溜まっており、今にも零れ落ちそうではあったが少女はそれを気にする様子もなく、辺りを確認するため立ち上がって周りを見渡す

「さっき…こえ？ うん、だれかのこえが聞こえたような……」

確認するように呟きつつ少女は立ち上がり、辺りを見回す少女。頭を動かすたびに、左右に括られた髪がまるで跳ねるようにぴよぴよよこと動いている

しかし少女が見る限り、人はおろか動物すらも確認できない

それでもしばらく辺りを見回していた少女の視線が、ある方向に向けられる

「…こつちからだったっけ？」

少女の視線の先には「犬のフンはキチンと飼い主が処理しましょう！」という、ある意味お決まりの注意書きが書かれた立て看板に広い芝生とそれを囲うような茂み

ふと、少女の頭をよぎる記憶があった

この公園で、昔家族と一緒にピクニックをした懐かしい記憶

少女の、厳しくも優しい父が頭を撫でる

少女の、見ているとほっとする笑顔を浮かべる母

少女の、頼りになる大好きな兄が少女の座る場所を整えて

少女の、姉が手を引いてそちらへ導いていくれる

少女と、皆が笑いながら

そんな、幸せだった記憶が蘇り、少女の瞳に溜まっていた涙が頬を伝って零れ落ちる

再び押し殺した嗚咽をあげそうになり、それと同時に俯きそうになった時　キラリと、茂みの中で何かが光った

「……………あ」

その光を見て少女は、その場所へと若干駆け足気味に近づいて

「うにゃあっ!?!　へぶっ!?!」

こけた

盛大にこけた

受け身も取れず、手を体の前面に持つていこうとすることすらできずに

無駄に勢いが付いていたのか、まるでヘッドスライディングかの如く

残念な事に、その少女の運動神経は切れていたのだ

いや、切れていると家族に言われるほどに酷かったのだ

どれだけ酷いと言われるとそれはもう酷かったのだ

幼少期、傷を作った原因の9割近くがこけたという理由ぐらいに酷かったのだ

何も無い道でこける位……いやこれは天然だったか

話を戻して、倒れてしまったついでに顔を茂みへと突っ込んだ少女。その際少し頬を引っ掻いた程度で済むあたり、彼女の運はかなりの物なのかもしれない

夕暮れの、そろそろ本格的に日が沈み、夜が訪れようとするこの時間の公園。辺りには人っ子一人おらず、静寂に包まれる中。茂みから体が生えているその光景はシニールともホラーとも取れそうなる意味芸術的な光景を生み出している

倒れた少女はぴくりとも動かない



そんな彼女を見ていたのは半分ほどその身を沈めた夕日だけであつた……

くプロローグ、完く

「…ふ、ふみゆ……」

いや、どうやらまだ終わらないようだ。倒れていた少女は茂みから枝や葉っぱがそれなりにくっ付いた頭を引き抜く

立ち上がりつつくらくらする頭を覚醒させるために、左右にブンブンと降る

「にゃあ〜、お顔がひりひりするの〜……」

おそらく顔を打つたのだらう。そんな泣き言を言いつつグシグシと顔全体を擦る様に汚れた顔を袖で拭いていく少女

続けて服や膝などに付いた土埃を払い、ある程度取れたところで改めて茂みの中を、今度は慎重にしゃがみつつ確認する

茂みの奥に、僅かに夕日を反射して輝く何かが見えた

その視界に移ったモノを手を伸ばして取り、確認するように目の前に持ってきて ソレに、目を奪われた

それは500円玉程度のサイズのぼろぼろの金貨

その金貨の中心部分に、埋め込まれているかのように付いている汚れた銀色の球体

それを囲うかのように描かれた透明な、魔方陣の様な図形。その形は所謂五芒星と呼ばれる形をしている

夕日を反射する金貨はぼろぼろで汚れていて、だが、とても綺麗で

銀色の球体に付いた汚れを指で軽く拭く。僅かに球体が輝いた様に見える、少女はますます目を奪われる

少女はしばらく、そこから動けず

その手にある金貨、その中心にある銀色の球体から目を離せずにいた

これが少女、高町なのはと奇妙な魔法の杖との出会い

デハイス

魔法少女リリカルなのは x Silver eyes

第一話 『始まり』 (後書き)

もう一つのプロローグへと続きます

裏一話 『もう一つの始まり』（前書き）

この話で一応プロローグは終わります。

色々書いていきたいことがあるので、原作開始までかなり伸びる  
かもしれませんが、どうか宜しく願います。――（）<

裏一話 『もう一つの始まり』

何か、聞こえた気がした

それは、一体いつからだったのか

声が聞こえてくる

それは遠いのか近いのか

声が聞こえている

とても聞き辛い。まるで何かを我慢しているかのような

声が聞こえる

喚いてるわけでもない、叫んでいるわけでもない、だが

声が、聞こえた

なぜかはつきりと耳へと届き、そして理解する

泣き声が、聞こえた

この声の主は、今泣いているのだと

（ ったく、一体何なんだ？ ）

さっきから誰かが泣いている、それがどうにも気になる俺は不機嫌に覚醒を果たす

目覚ましが泣き声のせいか、または別の理由からか気分が今一つ優れない

霞む視界の中、辺りを見る……確認できない

正確に言えば、辺りがほぼ真っ暗であるため、確認のしようが無いと言ったところか

所々光が漏れている個所から外が確認できなくも無いが、目的のもの  
ノ おそらくは人間か？ はそこからでは見えない

しかしさっきから頭の中が引つ掻き回されているみたいなの不快感が俺を苛む。気持ち悪い、どころではなく正直また意識を手放しそうだ

なぜこんな状態なのか とりあえずあえず行動しようとして、諦める

力を入れた瞬間、全身を割れるような痛みが走ったためだ。内心舌打ちしつつも、次の手として身体を動かさず周囲の状況を確かめようと、センサーを使い

（ ガッ…！？ ）

今度は頭を刺すような痛みが走り、行為を断念する。もし無理やり  
にでも行為を続けていたら、頭の中がどうかなってしまいそうな予  
感する

昔から嫌な方面だけは勘が良く当たる…とても嬉しくはないが。し  
かし助けられた場面も多数あるため、複雑な気分だ

そんな思考が無意識の内に流れる

頭はじくじくと痛みを発し、相変わらず泣き声は止まない、周囲の  
状況を確認することもできない

なんだかもう色々面倒になってきた俺はとりあえず

「ここで泣くんじゃねえ。眠れないだろうが」

と、喋って

いや、喋れたのだろうか？

喋ろうとした瞬間に、何かカラダの中で爆発したような、そんな  
感覚がした

緩やかに意識が遠のいていく

閉じていく視界の中、何かが見えた気がしてそちらに意識を集中する



こちらを覗き込む人間、おそらくは子供。深い紫色にも見える黒色の瞳がとても印象的な、少女

そこまで確認した直後、俺は意識を失った

魔法少女リリカルなのは Silver eyes

裏一話 『もう一つの始まり』（後書き）

質問等があれば、ここの欄で登場キャラ同士の掛け合いをしつつ答えていきたいとひそかに思っております。

何かございましたら、遠慮なく送って下さると大変嬉しく思います

第二話 『デバイスは夢を見る』状況整理と眠る少女と』(前書き)

3話目です。ようやくストーリーとして本格的に始まるわけですが、自身の構成スキルの低さのせいか、ほとんどストーリーが進んでいない気がします。すいません；

10/20日修正

少女の瞳の色の修正。別の事と勘違いしていたみたいです。すいません；

## 第二話 『デバイスは夢を見る』状況整理と眠る少女と』

澄み渡った青い空、所々浮かぶ白い雲、空に浮かぶ太陽から降り注ぐ日の光

ベンチのすぐ傍にはよく手入れされた観賞用の木が生え並ぶ他、色々な自然に満ち溢れている

降り注ぐ日の光はとてもいい感じに遮られており、日差しによって暑過ぎることも無く、日陰によって肌寒いということも無い

あのベンチに座ってのんびり過ごす時間は、まさに至福の時と言っても過言ではないだろう。ここで何か飲み物があれば言うこと無しではあるのだが、そう都合良く持っているわけは無い

(まあいいさ……あれだけ条件の揃った癒しスポットなんて滅多に無い。欲張りすぎると碌なことにならんだろうし、さっさとのんびりするか)

ベンチに向かって歩き出す。心なしか早歩きなのは気のせいではないだろう

とは言っても俺の体躯は10歳程度のため、早歩きでも若干焦れる

(やれやれ、どれだけ子供染みてるんだか)

自分に対して苦笑いしながら歩いている途中、少し強めの風がふき  
思わず目を閉じてしまう

風に乗って自然特融の香りが流れくる。その安らぐ香りを楽しみつ  
つ目を開けて再び歩き始めようとして、自分が向かっていたベンチ  
に誰かが座っている事に気付く

綺麗な…とても綺麗な少女だ

長く美しい金の髪。それを両サイドで括っており、余った髪を背中  
へと流している

風によって流れるたび日の光が反射し、髪全体が輝いている様な、  
そんな光景が広がっている

視線を少し下にずらせば、整った顔。おそらくは美少女と評価され  
る容姿であろう

目蓋を閉じているため目の色は分からないが、きっと綺麗な目をし  
ていると思わせる何かがある少女にはあった

触ったら壊れてしまいそうな印象を受ける華奢な肩から延びる腕は  
細く

白く、簡素な造りながらも上品な印象を与えるワンピースから美し  
い脚線が覗く

一般的な肌よりも白い……かといって病的なほど白くもない。所謂  
美肌というやつだろうか

それが少女の美しさに拍車をかけており、まるで一種の芸術品かのような、どこか神秘的な雰囲気纏う少女から目を離せない

とりあえず無駄に良さげな言葉と表現を無意味に使い無駄な状況描写をして現実逃避をしたが、そろそろ本音を言おう

(なんてこった……既に先客が居たとは……)

そんな感想を抱くとガツクリと肩を落とし項垂れる。少しの間シヨックで固まっていたが、気を取り直して姿勢を正すと再びその光景を視界に収める

先程は気付かなかったが、少女からは微かに寝息が聞こえている。眼を閉じているというよりもお昼寝の真っ最中のようだ。

(最高の癒しスポットで優雅に昼寝だと……？ 羨ましすぎる)

思わずそんな思考が湧いて出る

おそらく今の俺は凄く羨ましげな視線を少女に送っているのだろうが、当然寝ている少女に対して何も効果はない。それでも暫くの間未練たつぷりに少女とベンチを見ていたものの、諦めたように歩き出す

(仕方ない、別の場所でも探すか ん?)

ふと、頭の片隅に引っ掛かるものを感じた

小さな小さな違和感……いや、違う。これは

(……既視感? 一体何の )

その正体を探ろうと、先程頭に引っ掛かったモノに意識を集中しようとして

「ん、うう……にゅ〜」

(……にゅ?)

少女が発した謎の言葉に意識が持ってかれてしまう。それと同時に引っ掛かっていたモノは完全に霧散してしまった

……別に少女が悪い訳ではないのだが、どうしてもジト目を向けてしまうのを止められない

ベンチに座っていたもぞりと少女が身動きする。どつやら寝ていた少女の意識が覚醒しつつあるようだ

「……っんっんっん！」

と、そんな気持ちよさげな声を発しつつ頭上で両手を組み、盛大に身体を伸ばしながら目を開ける少女。ふと、少女の開かれた目がこちらを見た。思いつきり互いの視線が絡み合う

予想通りというかなんというか、ワインを思わせるような深い赤の瞳。それが俺をロックオンした

少女の時間が止まる…1秒…2秒…3秒

「え…えええ！？」

驚いたような少女の声、わたわたと全身で「私慌ててます」と表すかのような動きをしている

まあそんな少女の様子を俺はバツサリ無視して、先ほどから抱いていた疑問をぶつけるために口を開く

と、ほぼ同時に少女も口を開き

「誰だお前？/あなた誰！？」

俺と少女の声が重なった



意識が覚醒する

何も考えず…というか考えられない。俺は久しぶりに、本気で困惑している

(……夢?)

そう、夢だ

懐かしい、かつてお気に入りだった場所に謎の少女。しかもやたらとリアルな夢だった。しかしまあ……

(夢を見るなんて……昔以来だ)

遠い昔の、もう戻らないあの日

何も知らず、ただ普通の子供として愛されていたのだと理由もなく信じていた、シアワセな日々。それ以来夢を見たことはなく……というより、夢を見るほど深く眠れた試しが無い

(しかし、実際に夢を見るのは浅い眠りの方のレム睡眠とかいう方だから、深く眠れたと表現するのは色々)

そんなどうでもいい事を考えて、気付いた

頭の中の不快感が消えている

それだけではない、考えただけで頭痛が襲ってくるようなことも無いし、何より身体が軽い

軽く左腕を動かす…多少の痛みが走る、また感覚に微妙な違和感、細かい不満点はいくらでもあるもの、動くなら問題ないと結論付けて身体を起こそうと…起こそうと……

右腕に奇妙な感覚、先程から違和感を感じていたものの、おそらく身体が不調によるものだと

(……そろそろ現実から逃げるのはやめるか)

聴覚には誰かの寝息と、身動きをするたびにシーツが擦れる音が流れ込んでくる

それと同時に右腕の奇妙な感覚が若干強くなる

身体が強張る…どうやら今度は緊張しているらしい。これも久しく

感じていなかった感覚だ

右に顔を向けるのが怖いが今更の話だ。そもそも現在の周囲の様子は知覚機能があるため周囲の様子は把握できる。大事なことなので2回言いましたとも言おうと思ったのか。言いつもりなんてなかった

分かっていたことだ。ただ今の今まで現実を見ようとせず、身体の調子を確認するフリをして現実から逃げていただけの話

覚悟を決めて、ゆっくりと…意味も無く非常にゆっくりと顔を右に動かす

視界がずれていき、やがて見えてきた光景は

緩みきつた顔をした少女が右腕に抱きつくような形で寝ていた

「~~~~~ツ!!!」

解っていた事とはいえあまりの恐怖……そう、恐怖に叫びそうになるものの我慢に成功する

(ギイイイイイイヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!!(

胸中では馬鹿みたいに悲鳴を叫んではいたが。ああ、もしかしたら生まれて初めて恐怖によって叫んだかもしれない

暫くしてようやく無理やり落ち着いたフリをして、俺はこの状況を整理をしようとする

1、誰かの泣き声が聞こえた気がして意識覚醒。その後なんやかんやで再び意識を失う

2、再び覚醒。夢を見たことに本気で困惑しつつ、身体の調子を取り戻していることに驚くフリをしつつ現実逃避

3、現実に直面し、初めての叫びの経験

4、今現在の状況据え膳食わぬは男の恥……ん？

駄目だ、まだ落ち着いてないらしい。まあ考えていればその内落ち着くだろうと希望的観測を抱きそのまま思考にふける

2 4の流れはまあ自分で確認したわけだから問題ない。問題は1 2の間な訳だが……

(まあ、今の状況的に右腕に掴まっている少女に拾われた。というのが一番違和感が無いか)

意識を失う直前見た少女 栗色の髪と黒い瞳…まるでアメジストの様な紫色にも見える印象深い瞳。辺りはほとんど闇に包まれては要るものの、俺にとって少女の髪の色を確認することは別に難しくもない

ホー、ホーという鳴き声……フクロウだったか？それとリーン、リーンと鈴虫が鳴いている状況と合わせておそらくまだ深夜と言うべき時間帯なのだろう。頭を動かさず視線を巡らせると時計が見える  
…時刻は3時半

時間帯のせいか、すぐ横の少女以外にもこの建物 おそらくはこの少女と家族が住む家 に三つ程反応があるが、どれも動きが無い所を見ると就寝中なのだろう

ある意味好都合な状況ともいえる。今なら誰にもばれずに逃げ出せるだろう

すぐさま実行。少女が掴む右手を捻り、（ガシッ！）抜こうと……？

再び視線は右へ。少女が先程よりも力強く掴んでいる光景が見えた

状況から推察 結論。右手を捻って少女の手を離させる事に成功。しかし抜こうとした瞬間少女が再び、最初よりも強く俺の腕を掴んだ

偶然の産物かそれとも別の何かか。結果的に俺の腕を完全に固定させるという事態に陥る

ここで俺が手を外そうとする場合、先程捻った方向とは反対へ強引に捻ればいい。だがその場合腕をガツチリと掴んでいる、というよりもキメている少女は

（間違いなく、起きるな……）

先程みたくほとんど衝撃を与えずに外すのは不可能な状況のため、はつきり言っただけしょうも

(……ああ、待機モードに戻れば問題無い……じゃないか)

完全に呆けていた。どうやらまだ落ち着いてないようだ……いい加減頭を冷やさねば

とりあえずクールダウン。深呼吸を繰り返して頭をスッキリさせる。まだ心は動揺してはいるが、とりあえず頭はスッキリした

頭がスッキリしたことによりスムーズになった思考は、次々と自身の状況を理解していく……本当に今までどれだけ呆けていたのか良く解る

はつきり言っただけ俺の体はボロボロ。外面はほぼ修復は済んでいるものの、内面はかなり酷い

エネルギーも枯渇するか否かというレベルまで行っていた形跡、というより情報ログがある。さすがに肝が冷えた……肝なんて物はないが

現在は最大保有値の1〜2割と言ったところ。まあ元々あまり最大保有値は高くはないためこれはそこまで深刻ではない

センサーはどうやら7割ほど修復済み。周りの状況が分からなければ

ば状況判断に支障がでるためかなり優先的に治すようにしているのが幸いしたか

他にも色々診て回るが……よくもまあここまでといった感じの壊れ具合に辟易へきえきとする

一番致命的なのは自己でエネルギーを生成する機能。俺の中心核にある物が持つ規格外の機能の一つ

エネルギーを理論上無限に生み出すというふざけた機能だが、これはほぼ死んでいる。俺にとって一番重要な機能でもある。致命的すぎるな

それとは別に、エネルギーを回復するための機能もあるが……こちらにもダメージは大きい

一つは周囲の魔力素を。もう一つは魔力保有者から魔力を取り込み、自身のエネルギーに変換するこの二つの機能。前者は無いよりはマシ程度であるが、完全に死んでいる

元々あまり役に立たないが、今の状態だと喉から手が出るほど欲しい機能……普段でも肝心な時にも役に立たないのか

そして後者……これは

視線は右へ、腕を掴む少女へ固定

(……なるほど、凄まじい保有量だな)

何の因果か、俺を拾った少女が魔力保有者だったという事が

そのお蔭で生きていられるのでその因果に感謝しつつも、少女の魔力保有量に驚きを隠せない。明らかに年齢に対する保有量が釣り合っていない

5〜6歳に見えるのだが、実はもっと年を取っていたりするのだろうか？

…まあ今は後回しか。再び状況の纏めに入る……

1・隣にいる少女に拾われたお蔭で一命を取り留める

2・ある程度回復して、無意識の内に待機モードを解除したため現在の状況に陥った可能性が濃厚

3・外はなんとかあったが内はボロボロなので無理は禁物。早急にエネルギー回復の必要あり

4・そのエネルギー回復手段が限られているためこのまま逃げ出すのは得策ではない

3、については先程確認した通り。4はこのまま外に出たとして、この少女以上の…言い方は悪いが、高物件に出会える保証が無い。

1、2については証拠がないので推測でしかない訳だが、1はそれしかない気もする

2については…確かに待機モードはエネルギー消費率の低下、自己修復機能の効率上昇等。良い事尽くしだが自発的に使う機会は少な



い。突発的な事態に対処しやすいのは人型の方だからだ。モード切替時には多少とはいえ無防備になる上、タイムラグも起きる

待機モードを使う状況となればとりあえずは二つ。致命的なまでの損傷、もしくはエネルギー不足。特にエネルギー不足は最悪だ。それが無ければ何もできない、自己修復さえも

俺は寝ている時に襲われる事を警戒、睡眠時は人型でいようとする習慣がいつの間にか付いたため、ある程度状況が改善された後人型になった。と考えれば推論ではあるが正解の可能性は高い

さて、状況の整理は済んだが、問題はこれからの事

(あまり気は進まないが、この少女の傍に置いてもらうというのが最善か)

兎にも角にも体を直す事が最優先。現在自力でエネルギーを生成できない状況のため、少女から魔力を分けて貰わないとどうにもならない

そうなると彼女の近くに置いてもらうか、常に所持してもらうのが最善だ。離れると分けて貰うことができなくなる

(となると、事情を説明して協力してもらわないと駄目か…)

さて、少女の答えは承諾か。それとも 拒絶か

承諾は……普通の人間なら有り得ない。人は異端を簡単に拒絶する……だがそれが普通の対応であり、人として正常の反応である

誰だって自分から危険であるかもしれないモノに関わろうとするはずがない……この少女はどうなのだろうか

魔力を保有しているということは魔法に関わりのある人間なのだろうか？ その可能性は無くもないが、この緩みきった顔した奴が魔導師というのはどうにも信じられない

……キリが無い。思考をストップした後待機モードに戻る。今の内に少しでも直していた方がいい。拒絶された時の保険として

「う……うう……」

横の少女からの声。どうやら掴んでいた物が無くなったせいかわどく不満げだ。緩んでいた顔が険しくなる

さすがに背に腹は代えられない。こちらは命が掛っているのだ。我慢してもらわないと

「う、あう……ぐすっ」

いや待て、さすがに泣かれるのは予想外だ。いつの間にか険しい顔から不安げな、寂しげな顔になり、手は今も尚何かを掴もうと布団

の上をさまよっている

なんだこの状況は。俺が悪いのだろうか？ 他人の安眠よりも自分の命を取る俺は間違っているのだろうか？ いや、間違ってるはずは無い。普通はそうする誰だってそうする、はずだ

「ひ……は……やなの……」

閉じている少女の目、そこから何かが流れ落ちて

「……すー……うにゃー……」

横には安らいだ顔にも、緩みきつただらしない顔にも見える少女が眠っている

その手にはもう離すまいとばかりに、先程よりも更にしっかりと握まれた俺の腕

「……………」

俺は、何をしてるのだろうか

そう胸中でつぶやくが、答えは帰ってこなかった

第二話 『デバイスが夢を見る』状況整理と眠る少女と』 (後書き)

次はなのはSIDE、というよりもこの小説でのなのはの過去描写になると思われます。

と、一応自分確認用の主人公となのはの設定？メモみたいなのができておりますが、こういうのは需要があるのでしょうか？かなり独自設定がある…ような気が致します。なのでもし気になるという方が一人でもいらっしゃる場合は上げてみようかと思しますので、感想のほうに記入していただけると助かります。

長くなりましたが、それではまた次回で会いましょう

第三話 『少女が一人でなくなった日』（前書き）

……ええと

ほの…ほの？を指摘す新参者です、はい

……どうしてこうなった

と、とりあえずなのはSIDEの第三話となります！

### 第三話 『少女が一人でなくなった日』

今から一年くらい前からだったか。少女の生活が一変したのは

仲の良い家族。暖かい家庭

それが突然、壊れた……少女の父、高町士郎が倒れたことによって

母の大好きだった笑顔が、見えて悲しい作り笑いになった

いつも元気に、陽気に振る舞っていた姉が、空元気になった

兄の目が、雰囲気、態度が。とても恐くなった

それから母は、病院に入院した父の世話と翠屋の経営のため、殆ど家に居なくなった

姉はそんな母のサポートと学校の両立のため、妹に構えなくなった

兄は学校以外の時間はひたすら道場に籠るか、外に出かけるようになった

少女は一人になった

少女の新しい一日が始まった

少女の生活が変わってしまっ  
てしばらくたった。相変わら  
ず少女は一人だった

朝、誰も居ない家で起床

一人での朝食

リビングに置かれたお金

一人でのお留守番

一人での勉強

一人の昼食

一人でテレビを見て

一人での散歩

一人で公園に入り

耐えきれず、一人、泣く

明日も明後日も明々後日も、  
そんな日々が続いた



何時の頃だったか。たまたま公園に居た女性が、少女が泣いている事に気付いた

ひどく心配してくれた。赤の他人である少女に対して

少女は凄く嬉しかった。嬉しくてまた泣いた

次の日も、また次の日もその女性は少女の様子を見に来てくれた

少女は嬉しくて嬉しくて、公園で女性を待つ時間が好きになった

それはある日の休日だった

少女はいつも通り、公園へと向かっていた

入口へと差し掛かった時、声が聞こえた

気になった少女はそちらを見る

いつもの女性が、男性と、おそらくは同年代くらいの少年を連れて一緒に公園で遊んでいた

その様子はとても楽しげで、それを見た少女も釣られて笑顔になった

一緒に遊んで欲しいと、子供としては当然の欲求が湧き出てくる

少女は声を掛けようとして 固まった

少年が放った言葉が、彼女の動きを止めた

「さいきんお母さんが家にいないじかんが多いからさみしい」

その言葉が少女の浮かれていた心を抉った

その少年が悪い訳ではない。少年としては親と一緒に居たいというのは当然の欲求だろう

その女性が悪い訳ではない。女性は他人とはいえ、泣いている少女を放っておくことなどできなかったのだから

では、誰が悪いのか ？

（ わたしだ ）

自分自身の心が発した言葉が、少女を責める

（ 赤の他人なのに。かんけない人なのに。そのやさしさにわたしが甘えた、甘えてしまった ）

そのせいで

） あの上に、さびしい思いをさせた）

少女は再び、一人になった

一人きりの公園で、相変わらず泣いていた

不意に少女が顔を上げた

そのまま隠れるように近くの茂みに身を潜める

先程まで少女が居た場所にやってきた人物がいた

あの日、声をかけてくれた女性だった

女性は辺りを見渡し　まるで誰かを探しているかのように　しばらくして来た道を戻っていった　し

少女は女性が去ってから念のため10分ほど待つと、安心したよう  
な、どこか空虚な笑みを浮かべてベンチに再び腰を下ろす

再び、泣き声が聞こえ始めた

少女は人の気配に敏感になった

誰かが来るたびに隠れる事を繰り返すうちに、いつの間にかそうなっていた

少女は泣く時にほとんど声を出さなくなった

万が一誰かの接近を許しても、泣いていると気付かせたくないと思死になって声を抑えた

少女は人通りの少ない場所と時間帯を選ぶようになった

何度も公園に入り浸っていた故に可能になった事だった

夕方と言うには遅く、夜と言うには少し早い時間に家に帰ると、誰も居ない家が少女を迎える

この時間が一番少女にとって都合が良かった

早すぎると、誰も居ない家に一人で居る時間が長くなってしまっ

誰も居ない家は、人の気配に敏感になった少女には辛いため、あまり家には居たくない

遅すぎると、誰かが早く帰ってきていた時に、その人に心配されたりしてしまうためだ

何回かその失敗をしてしまった時は、母に心配を掛けて泣かせてしまったこともあれば、兄に物凄い剣幕で一方的に怒られたこともあった

姉に何か言われることはなかった。学校と母のサポートで疲れきって、家に帰ると早々に寝てしまうからだ

少女は学習していった。どうすれば迷惑を掛けずに済むか。どうすれば余計な手間心配を掛けずに済むのか

少女は家族に心配を掛けない【いい子】になっていった

新暦61年12月21日

少女、高町なのはのいつも通りの一日が始まる

いつも通りの一人での朝食。黙々と食べる

いつも通りのリビングに置かれたお金。最低限のお金を使って昼食と夕飯を買い、残りは貯金している

いつも通りの兄の外出。休みの日は、兄は毎日この時間に居なくなる

いつも通りの一人でのお留守番。誰も居ない家。合鍵は持っている  
とはいえ、不必要に家を留守にしてはいけない

いつも通りの一人での勉強。幼稚園には行っていない。登下校は誰かに迷惑を掛けてしまうから。その分を自主的に勉強する

いつも通りの一人の昼食。コンビニでサンドイッチを買う。毎日同じ味で飽きてしまったが、飲み物を使って無理やり飲み込んだ

いつも通りに一人でテレビを見る。天気予報を見て雨具が必要かどうかを判断する。余りに雨が酷い時は外には出ない。風邪を引いてしまったら家族が大変だ

いつも通りの一人での散歩。目的なんて無い。家に居るのが耐え切れないから正直どこでもいい

いつも通りに一人で公園に入る。人目に付きにくく、この時間帯は更に人通りが少なくなる絶好のスポットにあるベンチに座る

いつも通り、一人、泣く。貯めこむと身体の調子を崩してやっぱり迷惑を掛けるから。だから、泣く

明日も明後日も明々後日も、そんな日々が続くのだと少女は思っていた

そんな未来を想像して、少女は更に泣いた

声も泣く、泣いた

そんな少女に

誰かの声が、聞こえた気がした

そこは、とてもあたたかい場所だった

透き通るような青い空。まるで綿菓子のようなふわふわの小さい雲と、とてもあたたかい光を放つ太陽

とてもきれいに手入れされている木々が並んでいて、そのすぐ近くにベンチがある

お日様の光がちょうどいい感じに遮られているその場所は、おもわずここで昼寝したくなるような、そんな気分させる

わたしがよく行っている公園に雰囲気似ている気がしたけど、あの場所はここまで居心地の良さそうな場所ではなかったはずだ

わたしはふらふらと、まるで寝起きのようなふわふわした気分ですらに近づいていく

ベンチまで後少し、というところまで来たときにわたしは気づく

(…だれか、ねてるの)

なんだか気になって目をこらし……おもわずため息がもれる

ものすごいきれいな女の子が、そこにいた

(ふわあ〜……)

おもわずぽーっと見とれてしまう

ふと、後から。わたしからそう離れていない位置に気配を感じて驚く

ここまでだれかが近づいてきて気づかなかったのはすごく久しぶり  
かもしれない

なんとなく、おそろおそろ後ろを振り向くと目に入ってきたのは

真っ白な、髪

まるで冬に降りつもった新雪のような、きれいな白

そして印象的な…銀色の目、でも半分ほどしか見えていない 確か  
こつこつを半眼って言うんだっけ？

こちらを見る半分閉じてた目がだんだん開かれて………なんだ  
か驚いてる様子なの？



でも、そのおかげで銀色のきれいな目がはっきりと見える

「な……な……」

「え……?」

目の前の人 わたしより年上の男の子。10歳くらいなのかな？  
が何か喋った、気がする

なんとなく、なんとなく緊張する。男の子の真剣な表情、もしかして、これから何か重大な

「なんか増えたあああああああああああつ!?!?」

「にゃああああああああ!?!?!?」

いきなり大きな声を出されたから、わたしは驚いた拍子に叫び返していた……



だんだん感触がはつきりと伝わってくるようになる

まるで人の腕のような感触がする。とは言っても誰かと一緒に寝たのはもうずいぶんと昔なため、あまり自信が無い。思わずさわさわと手で確かめるようにさわりながら、ゆっくり目を開けていく

まず目に映るのは白い髪……どこかで見たような気がするけど、思い出そうとしてもまるで頭に霧が掛るかのように思い出せない

視線をずらすと見えてくるのは　こっちを見ている銀色の目。こっちもどこかで……

「……起きたのならば離れてくれないか……いや本当に真面目にできるだけ迅速に」

その言葉に我に返る。今のわたしはその人の手をまるで抱きしめるようにして掴んでいる

その状況を認識すると今度は一気に顔が熱くなる。おそらく顔は真っ赤になっていると思う

「じゃ……じゃあああっ！……！」

「っっ……！？」

思わず思いきり力を込めて、押し返すように突き飛ばす…ううん、  
そうとする。けれども、今のわたしはベッドの端に居たらしく突き  
飛ばそうとした反動で私が

僅かな浮遊感、思わず目をぎゅっと瞑る。けど、何時まで立っても  
予想していた衝撃は来ない……目を開けてみると

「……あ」

「やれやれ、突き飛ばそうとして自分が落ちそうになるのか（間抜  
けだな）」

腕をわたしの背中へと廻して支えてくれている姿が見えた。それと  
同時に言葉を掛けてくる。最後の方はボソッと喋ってたのでよく聞  
こえなかったけど

それと体勢のせいかな、その人の顔が近くにあるため少し……ううん、  
凄く恥ずかしい

「……あ、あり……すいません……」

反射的にお礼が出掛けたけど、迷惑を掛けた時はまず謝らないと。  
と思いついたわたしは途中で言い直す

「…… 別にいい。部屋に見知らぬ者が居たら驚くのは普通の事だ」  
言い直したせいか、少し怪訝そうな顔をしたけどそう言ってくれた事にとりあえず安堵する。それと同時にそのそっけない口調にどこか違和感を覚える

なんだか、何かを我慢しているような

「降ろすぞ」

「え？あ、はい……」

そう言った後、衝撃を与えない様に ゆっくりと丁寧に わたしを床に降ろした後、背中を支えていた腕が離れていく

(あ……)

離れていく温もり。それに一抹の寂しさを覚えつつ、先程言えなかったお礼を言う事にする

「あ、ありがとうございます」

「……」

頷く動作、どうやらそれが返事の代わりみたい

改めてその人と向き合う形になり、その人の全体の容姿が見えてくる

わたしより年上…多分10歳くらい、男の子

所々跳ねて肩までかかる白髪に、とてもきれいな銀色の目。でも半分ほど閉じているせいで睨んでいるようにも見えて、どこか怖いという印象を受ける

着ている服は余り見ないタイプ…例えるなら口元まで隠すような紺色のタートルネックなのかな？下はハーフパンツのだけど、その下からズボンみたいなのが覗いていて、まるでズボンを2つ履いてる様に見える

視線がその人の目に戻る。お世辞にもいい目つきとは言えない、その銀色の瞳。何か引く掛かる

(どこかで、見たことがあるような)

じーっと男の子を見る

「……」

こちらを怪訝そうに伺う銀色の瞳……やっぱりどこか　　ってああ  
っ!？

やっと思い出す。その瞳は昨日拾ってきたコイン、その中心にあった球体と同じ色なのだ

そこまで考えて辺りを見渡す。昨日は帰ってきてお風呂に入った後すぐ眠ってしまった。拾ってきてしまったコインを抱いて

いけない事だと解っていた。落し物を拾ったら交番へ　それが模範的な【いい子】の行動だと解っていた

それでもなぜか……ううん、もしかしたらあれが藁わらにもすぎる気持ち  
ちって事なのかな

あのコインからなぜかほっとするような温もりを感じた気がして…  
…手離せなくなったのだ

一通り部屋を探してみたけど、コインは見つからない

なんとなく、そんな気がしていた

だって男の子の……思い出すのも恥ずかしいけど、その腕に抱きついて眠っていた時に感じた温もり。それはあのコインと同じモノだったから

(でも、そんなことありえるの……?)

コインが、人になるなんて

(確かめてみたい……けど)

違ったらどうしよう。という思考が頭をぐるぐると回る

(でも……知りたい)

気分を落ちつける。覚悟を決める。正面から男の子を……正確にはその瞳を見つめて

「あの……あなたは、あのコインなんですか？」

そう、問いかけた

男の子はその言葉を聞き僅かに、本当に僅かに目を見開いた後、溜息？を付きつつ答えてくれる

「……ふう、こちらから切り出す手間が省けたか。よく判ったな？」

「あ、いえ……その、ほとんど当てずっぽうみたいなものですけど…



…」

わたしは自分がそう思い至った経緯を…とても上手な説明の仕方とは言えなかったけど話していく。時々詰まったりもした

男の子がそれに文句も言わず聞いてくれたことが、少し嬉しかった

説明が終わる。わたしは喋り終わった後ほっと一息を付く……そういえばこれだけ喋ったのはいつ以来だったろ

「…………ふむ」

わたしの説明を聞いて少し考え込む仕草をする男の子。今更だけどその動作の一つ一つがとも子供とは思えないような…落ち着きと言っのたろうか。それがある

「（本当にほとんど勘みたいなものだな）まあそれならその辺は説明する必要はないか。では改めて 初めまして。俺は魔法の杖…  
…所謂デバイスと呼ばれる存在、みたいなモノだ」

そう自己紹介しつつ男の子が銀色の光に包まれて、姿が変わる……公園で拾った、あのコインの姿に。途中から電子音みたいな声になつていたけどそれはあまり気にならなかった。不思議な光景にほとんど意識を奪われていたから

しばらくぼけーっとしてしまったけど、慌ててわたしは自己紹介し返す

「…あーは、はじめまして！た、高町なによ…なのはと言います…  
…？」

ふと、男の子の自己紹介に聞きなれない単語を聞いた気がした。頭の中で先程の言葉を反芻する。決して噛んでしまったことから逃げているわけではないです

「…魔法の、杖？」

魔法の杖とはあれだろうか。可愛い女の子がぶんぶん振り回すと星とかなんか色々出て変身して、最後は悪役を爆発させたりする魔法少女のお供的なあれことなのかな

「どついう想像をしているのかは知らんが、魔法の杖とは…デバイス そうだな、魔法の呪文プログラムを記録したり、魔法を制御するための調整演算をしてくれる機械…魔導師の相棒であり武器であるってところか」

まあ、あくまで俺の見解だが。と付け加えて説明してくれる男の子…この場合デバイスの子って言うのかな？ でも見た目人間だし、男の子でいいよね

「へ〜……」

それにしても、聞きなれない単語ばかり出てくるものかと思っただけだ、意外と身近な言葉が出てきた事に驚く

「えーっと、PCパソコンみたいな物……って事ですか？」

「まあ、そうだな。魔法専用のPCとも言える……のかもしれない」

なんだか魔法に対するイメージが崩れていく感じがする。なんとなくか魔法ってのは、こう、原理の解らない不思議なものであると思っただけだから。うん、実際に姿は変わったときは不思議だと思っただけ

「まあ、それでなんだが」

「……？」

男の子が凄く渋る顔をしつつ何かを言おうとしてるのだけど……凄く言いにくそうな雰囲気です

「あー……なんだ。俺みたいな得体の知れない存在ははっきり言って不気味だとは思うんだが」

「え、いえ！ そんなことは…無いです」

慌てながらの否定

確かに目の前の男の子は未知の存在で。さっき実際に姿が変わる場面を見せて貰ってなかったら、話してくれた内容もすぐには信じられなかったと思う。でも

「そんなこと、無い」

今度は男の子の目を見て、はっきりと言う。そう言いきるわたしを見て、目を細める男の子。それがどこか、悲しげに見えた

男の子は確かに人間でないのかも知れない。それでも

（不気味だというのなら、誰も居ない、明かりもついていない真っ暗な家のほうが、よっぽど不気味だよ……）

帰ってくる度そんな家を見て、わたしは何度恐怖しただろうか

そんな家で過ごす夜が、どれだけ怖かっただろうか

お母さんもお姉ちゃんも帰ってくるのは10時過ぎ、お兄ちゃんは

……

「……あー、とにかくだ」

男の子のその声に、わたしの意識は現実に戻される。そうだ、今はこの男の子の話を

「その、かなり無茶なお願いだとは解っている。だが、どうか暫くお前の傍に置いてくれないか？」

「え？」

いま、この人は、なんて、いった……？

暫くお前の傍に置いて

言葉の意味を自分の中で何度も、何度も確かめる。間違いじゃない……？本当に

「……すまない、先の言葉はわす」「一緒に居てくれるのっ!?!?」  
「あ?」

思わず大きな声が出る。でも、今はそんなこと気にならない

「一緒に……わたしと一緒に居てくれるの……?」

じっと見る。その瞳を。確認するかのように、継るかのように。そのきれいな銀色を

「……まあ、そうだな」

男の子の肯定

泣き出しそうになった。嬉しくて

「……ほんとに……ほんとっ……にっ……」

声が詰まる。目が凄く熱い。泣き出しそうに、ではなくて本当に泣いてしまったみたいだ

「……そ……反……予……外……」

男の子が何か喋っている気がする。でも今のわたしには聞こえない  
理解できない

頭の中が真っ白になって、涙が止まらなくて、でも心の中はとても  
あたたかい気持ちで溢れてる

きつとわたしは笑っている

泣きながら、笑っている

声を出して、泣いている

久しぶりに、声を出して、泣いている

悲しいのではなく、嬉し泣き

新暦61年 12月22日

その朝に

わたしは、一人ぼっちじゃなくなった



### 第三話 『少女が一人でなくなった日』（後書き）

というわけで、デバイスと少女の生活が始まるわけですが……

こんな入り方で違和感なかったでしょうか？もの凄く不安でございますが

ところで、デバイスの解釈ってこれで合っていますかね？

少しどころかなーり不安ですが

これについてご意見があれば送って下さると嬉しいです

勿論感想などもございましたらどうぞ！

そして気づいたら未だに名前が出てない主人公さん

……じ、次回も宜しくお願いします！

### 第三話 追記 『名前』（前書き）

「さすがにその反応は予想外だ…」

予想外すぎる反応に思わず声に出してしまうが、少女は気づいた様子がない

一時動きが止まった時「ああ、拒絶だったか」という諦めの感情が自身の心を占めていく。だがそれだけだ。慣れたことだ。仕方がないのだ

先の言葉を忘れてくれ

そう言おうとしたが、途中で遮られた

驚いた拍子に思わず呆けた声が洩れるが、そんな事どうでも良くな  
った

（何故、そんなに嬉しそうに泣く？）

訳が分からない。この少女が解らない

俺は少女に恐怖を抱く。本来抱かれるはずの存在である、俺が

だから気付かない

俺が、恐怖以外の感情を、抱いていたことに

俺は、気付かない

### 第三話 追記 『名前』

しばらくして落ち着いたわたし。でも泣く所をいっぱい見られちゃつてとても恥ずかしい

「…いきなり泣いちゃってごめんなさい」

「……」

無言で首を振る男の子。気にするなっことなのかな？

「あ……」

そこで気づく、そういえば男の子の名前を聞いてなかったんだ

「ん…どうかしたのか？」

「あ、あの！ お名前なんていうの？……じゃ、じゃなくて、何て言ってますか？」

男の子は「ああ、そういえば」という顔をしている。ふ、普通は名前は忘れないと思うけど、自分も忘れていたから人の事を言えないでも、返ってきた返事は予想外な言葉だった

「あー……無い」

「……え？」

思わずぽかんとして、男の子を見る。「冗談を言っているや、誤魔化している様子でもない

つまり本当に名前がない……？

「え、えーっと……じゃ、じゃあどう呼ばれていたとかそういうのもいいと」その前に「……え？」

遮られたので疑問に思いながらも続きを待つ

「俺に敬語は必要ない。無理に使われると……あー……あれだ、逆に疲れるんだ」

「え……」

男の子はそう言うけど、その顔は明らかに今思いついたと言った感じだ。口元もひくひくしてる

多分、そういったことに慣れていないのだと思う。そんな彼なりの不器用な気遣いに少し微笑ましい気分になった。

「あはは……じゃあ、お言葉に甘え……じゃなかった。そうするの！」

「さて、名前の話だったな」

焦るように話を戻す男の子。もしかして照れてるのかな？ 無愛想  
って思ってたけど、意外とそうでないのかも

「……ん、一度だけだったが、一応あったな」

「うん。どんなの？」

「シルバーSilver レイスWraith」

そう、呼ばれたこともあった。と男の子は言った

「……えっと……しるばーは確か…銀？」

そう確認するようには尋ねると、男の子は頷いてくれる

「ああ、合っている。Wraithは……亡霊や幽霊って意味だ」

「うんうん。つまり……え？」

つまり繋げると銀の亡霊（もしくは銀の幽霊）？　そ、それはなん  
と…うか……

「……あ、あはは……」

「……どつどつでも思えばいい」

凄く、怖いです（お化け苦手）

ちょっと微妙な空気が漂ったけど、気を取り直してわたしは考える

えーっと……さ、さすがに亡霊や幽霊はないよね。幽霊君だなんて嫌すぎるよ

だとしたら銀、しかないよね……うん、でもきれいな銀色の瞳が印象的だし、ぴったりな感じがした

「うん…じゃあわたし、ギン君って呼ぶね!」

そういつて元気よく宣言するわたし。黙ってうなづく男の子ギン君

その様子が少し照れくさそうに見えた気がして、わたしはなんとなく笑顔になった



第三話 追記 『名前』（後書き）

「ん……」

「どつした……あ」

少女が悩むような声を上げるので、思わず尋ねてしまった

どうも調子が狂う。やはり子供はガキ苦手だ

胸中で舌打ちする。そんな俺の様子に気付かず、少女は答える

「うん、名前のことだけだね」

名前？ まだ何かあったのだろうか

そんな事を思った瞬間、嫌な予感が俺を貫く

（……な、なんだ？）

なんだ、このタイミングで嫌な予感だと……？

目の前の少女が口を開く。嫌な予感はどんどん強くなる

「ギン君髪も真っ白できれいだから、シロって名前のほうが可愛くてよか「却下だ」…えー…」

少女が不満げな顔をしてくるが、却下だ。さすがにそれは勘弁してくれ

「シロ」と言う名前は、俺の中ではペットのイメージではない。さすがにそう呼ばれ続けられるのは……なんというのか、そう、情けなく感じる

尚も不満そうにこっちを見る少女を、どう説得したものか……妙な事に頭を悩ませる、そんな、平和な朝だった…

第四話 『昔の記憶と家庭の事情』前編』（前書き）

時間がかかってしまいました。第四話となります。

今回は少し文量が多めなので、前後に分けました。

それではどうぞ。

#### 第四話 『昔の記憶と家庭の事情』前編』

俺を拾った少女、高町なのはから海鳴臨海公園に俺が落ちていたのだと聞いたのは今日の朝の事

朝食等を済ませ、10時辺りに高町家を出て公園に来ると少女はベ  
ンチに座り、俺は何も考えずに空を見ていた。まあつまりはぼけ  
っとしていただけだが

今は正午…12時前ぐらいか

空を飛んでいる鳥 あれはなんとという名前だったか を視線だけで  
追っていると、ふと頭に浮かんできたのはとある疑問

そういえば、あの日からどれくらい時がたったのだろうか。と

機能停止した後の情報が無いため、まったくわからない状況なので  
ある

機能停止前に居たはずの世界であったなら、日付で確認するなりで  
きたのだろうか…その世界すら違うのだから確認のしようも無い

では何故今の俺は、停止前に居たはずとは違う世界にいるのだら  
うか？

停止する直前に色々としていた様な気もするが、その情報は曖昧過  
ぎる上断片的なため、判断材料にはならない

この身は水準よりも遥かに優れた記憶能力を有している…いや、そ

うできている

停止する直前だろうがなんだろうが記憶に残っていてもおかしくはないはずなのだが

はっきり言つて曖昧な記憶がある、ということのほつがこの身にとつては異常と言つてもいいのかもしれない

ああいや、記憶する機能自体に問題が発生していたとすればありえるのだろうか？

黙々と考える。推測したとしても証明する手立てが無いため、無駄だとは解つていてもついでに考え込んでしまうのは俺の悪い癖か

結局のところ、現在の俺には答えは出せないのだろうかというのが結論

とまあ、その日の事を考えていたからだろうか

とある記憶（情報）が頭を過る

あの日知った真実

自分がどういふ存在だったのか、という事

自分が生まれた意味、生きて、育てられたその理由

それを伝えるのは二人の科学者<sup>にんげん</sup>

ノイズが走る

もう喋ることは無い二人の内の一人

狂ったように笑うもう一人と、そいつを壊そうとする自分

ノイズがハシル

気がついたら故郷と呼ぶべきであろう場所は原型を留めておらず

自分のお気に入りである いや、もはや面影すら無いお気に入りであった場所で途方に暮れる自分

呆然と佇む自分と、ソレを護る様に取り囲むモノ達

一気に変わってしまった自分を取り巻く世界。その現実から目を逸らすかのように、周りに群がるモノを壊していく自分の手は……

ノイズが止まる

ソレを追うために自分が生まれた世界を飛び出した

理由は特に無く……ただ単に他にやる事が無かっただけなのか

逃げた一人を放っておくと何をされるか解らないというのもあるの

かもしれない

旅が、始まった

ただ探し出して、壊すためだけの旅が

どれだけの世界を渡り歩いただろうか

沢山の人に出会った

沢山の人が笑っていた

沢山の人が生きていた

沢山の人死んだ

沢山の人に怨まれ、疎まれ、拒絶され

そんな日々の果てに、ソレを追い詰め、壊し

その果てに、俺は

壊れた

(はず、だったんだがねえ…)

しかし現実はどうだろうか。あの時壊れたと思っていた自分はまだここに存在している

まあ細かいことを言えば確かに壊れている。自身の機能、その半分以上は停止状態

しかも、ある意味一番重要とも言える機能は停止状態でほぼ全壊。自己に備わっている自動修復機能では完全修復はおそらく不可能ときた

これではいざという時

(…はっ。馬鹿らしい)

そこまで考えてから思考を中断させる

もはや自分が戦う意味も理由も無い

それに…

(この世界に魔法という技術は無い、と思う)

ここに来るまでに何人かとすれ違い、その度に確かめてきたが魔力を感じない



人以外の物　例えば街灯だったり車だったり等　にも魔法による技術は使われていない

新聞やテレビでニュースをざっと確認しても関連する単語は確認できなかった

一般的ではない…所謂裏の世界ではどうかは知らないが

少なくとも今自分がいる海鳴市で魔法を使わざるを得ない事態になる可能性は限りなく低いのではないだろうか

そこまで考えて改めて再認識する

ここでは…海鳴市では自分という存在は異端なのだ

(ああ、もう一人居たな)

待機状態の俺を膝の上に乗せ、ベンチに座っている少女

魔法という技術が無い世界で魔法の素質を持った存在

“高町なのは”

今の年齢である魔力。その素質は相当なものであり、生まれた世界が世界ならば優秀な魔導士に慣れる可能性があっただろう

(まあ、素質が有ろうと関係ないか……)

少女は人間だ。俺とは違うし、素質が有っても使う機会が無いのならそれは一般人となんら変わらない

だからこそ、あまり長く関わるべきではないのだろう

俺はそれを使う機会と成り得る存在だ。いつそれが訪れてしまうか分かったものではない

日常から非日常へ……魔法という言葉に年頃の子供は心踊らされるかもしれないが、実際にはそんな良いモノなどではない

(……しかし、今のこいつの生活も一般的とは言えないのだろうか)

意識を少女へと向ける。俯き加減に座るその姿。その原因は分かっている

思い出すのは今日の高町家での出来事

遡ること約3時間程前

寝起きの場面等で一騒動あったものの、少女の腹が鳴るといふ事態によりとりあえず朝食を食べる事になった

その間待機モードになって大人しくしている……つもりだったのだが、なぜか俺は“人型で”朝食に同伴させられる羽目となった

現在のリビングでは、一人分の朝食をもそもそと食べつつも、こちらをちらちら見てくる少女の視線。それを意識しないよう新聞海鳴新聞　を読んでいる俺という状況である

リビングにある音は少女が食事をしている音と、新聞をめくる音、後は互いの息遣いくらい

「……………」

「……………あう」

訂正、時折漏れる呻き声みたいなものも追加か

気まずそうにするくらいなら俺を同伴させるなど言いたい

朝はこちらの事情の説明等、色々理由があつたため我慢していたが、

人とのコミュニケーションあまり得意ではないのだ。会話を求めているのなら俺ではなく、道場の方に居る奴にしてくれ

(…：そういうば、何故道場にいる奴はこいつを起こしに来なかったんだ？)

今現在の時間は8時を周り、長針が6の数字を指そうかといった時間だ。朝には若干遅い時間だが、まあ別にそれはいい

問題は別…：何故道場に居る、おそらくは少女の家族であろう奴は一緒に食事を取らなかったのか

ああ、この家の間取りは下りて来た際に一通り確認した。道場があった事に軽く驚いたが…：まあいい、話を戻そう

6時前に出ていったの二人　同じ家に住んでいるのだから、こちらも家族なのだろう　は、まあ仕方ないのだろう。急いでいる様子だったし、おそらくは仕事等の事情があるのだろうと思う

少女はまだ幼い。あまり早くに起こすのは良くないとも考えたが、気遣ったとしても考えれば、まあ辻褄が合わないこともないと思う

しかし道場に居る奴　面倒なので以下は奴と略す　は違う

起きた時間は4時とかなり早かったものの、それから7時頃までずっと道場に籠っていた。その後7時半頃までリビングにいた事から、おそらくは奴も朝食を食べていたのだろう

7時半なら別に早い時間帯でも無いはずだ。なら少女を起こしに来て一緒に食事してもおかしくはない。家族ならば

それとも奴は家族ではない？

そうだとしても同居人なら一緒に食事くらい

もしかして奴と少女は余り仲が良くないとか

そんなことを黙々と考えていると沈黙に耐えられなかったのか、少女から俺に話しかけてくる

「…ギン君はご飯食べなくてもだいじょうぶなの？」

そんな事を聞いてどうするつもりだ？

それがお前に関係あるのか？

食事する事のメリットもあるが、別にしなくても死にはしねえよ。構うんじゃないねえ

反射的に質問に対する答えがうつほど浮かんできたが、全て酷い内容だったので即座にその考えを消して新聞に意識を戻

「……つく……つ」

押し殺したような泣き声。視線をずらせば目の端に涙を浮かべつつある少女が見えた

(~~~~~っ!~)

思わず胸中で悶える。無視されたくらいで泣くくらいなら最初から話しかけるなど、やはり声に出さずに文句言いつつ

「……食べなくても平気だ」

どうにもぶっきらぼうな口調の上、抑揚の無い声になってしまったが何とかそう返す。ついでにすぐへタれた自分に対し罵詈雑言の嵐を心の中で送っておく

「…! そ、そっか…」

返事が来たことがよほど嬉しかったのだろうか。顔を綻ばせつつ食事に戻る少女。よくもまあ、あんな答えでそこまで喜べるものだと逆に感心する。“あんな答え”を返したのは他ならぬ自分自身だが

さて、食事を再開しつつも再び思案顔に戻る少女が見えるわけだが、まさか再び話しかけてくる気なのだろうか

(……勘弁してくれ)

とやはり声に出さず嘆きつつ、せめて現実から意識を逸らすために先程まで考えていた奴と少女の事について

(いや、待て)

待て、待とうか俺。何故俺はそんな事を考えている？

何故俺が“高町家の家庭の事情”について考えなければならないのだ

俺はたまたま目の前の少女に拾われてしまって、現在は事情により共にいるわけだが、ある程度自身の修復が終わればすぐこの家から居なくなる予定の存在だ

そもそも俺は新聞を読んでいたはずだ。この世界の情報を少しでも集めるために新聞を読み、更にはテレビも付けてもらってニュース番組が垂れ流している情報を集めていたはずだ

そう、付けてもらうために我が身に起こる拒絶反応を無理矢理押さえて、話しかけてお願いしたというのに俺は

(なんで、何故俺は必要な情報ではなく不要な情報の整理をしている)

別にニュースや新聞の情報を取得出来ない訳ではない。マルチタスク…所謂並行思考とでも言うのだろうか。まあ簡単に言えば“同時に複数の事柄を考える”という技術

それのおかげで少女との会話、新聞からの情報、ニュースからの情報、そして高町家の事情。4つの事を並行して思案することくらいなんら問題無いのだが…問題無いのではあるが……

（しつかりしろ……余計な事を考えるな。素数だ、素数を数えて落ち着け……いやしかし素数を数えたところで落ち着く奴っているのだろうか」

「え？ な、なにギン君っ！」

ジーザス。どうやら無意識の内に考えが声となって漏れていたらしい。不幸中の幸いなのか、小声だったため内容まではつきりと聞こえてないみたいだが

しかし少女はまるで花咲くかのように思案顔から笑顔になるとこちらに続きを促してくる。たたり、と冷や汗が流れ…た気がした。実際に流れるわけがないのだが

不幸中の幸いなんて考えたのは誰だ。俺か。いや突っ込んでる場合じゃない。これならまだ内容が聞こえていたほうがマシだった。適当に独り言だと言って誤魔化せば、変には思われるかもだがこんな状況にはならなかった



少女はニコニコ、いやへニヤへニヤ？とでもいった感じの締まりのない緩い笑顔を浮かべつつスタンバイしている

こうなってしまうた以上黙り込んでるわけにもいかない。そんなことをすれば今度はあの締まりのない笑顔が泣き顔になり、更に面倒な事態になるのは間違いない。それは先程実証済みだ

だが経験は活かすもの。マルチタスクを無駄に駆使し、数十にも及ぶ並行思考を持ってすればこのような問題など

(……………なにも浮かばない……………)

<sup>アラート</sup>警報が鳴っている(気がする)。目の前の少女の顔が緩い笑顔からだんだんと怪訝顔になる

<sup>アラート</sup>警報が激しくなった(気がry)。目の前の少女の顔が怪訝顔から段々と不安げな

「あ、ああ!」

「ふえっ!?!」

瞬間、頭に天啓とでも言うべき話題が浮かんできたため思わず大きい声が出た。少女が驚いているがそんなことは関係ない。取り敢えず先程浮かんだ手札(話題)を迷わず投下する。というかこの話題

しか無い

「お前、俺を公園で拾ったと言っていたが……その公園はどこだ？」

「え？ 海鳴公園のこと？」

海鳴公園と言うのか。いやまあ名称も大事だが、俺が知りたいのは場所な訳で。その旨をなんとか伝えたと彼女は顔を再び綻ばせ

「うん！ じゃあわたしが案内するの！」

と、素敵な笑顔付きで元気よくほざきやが……失礼。のたま宣った

(…まあ、ある程度予想はできていたさ……はあ)

それから十分程立った。今少女は無事朝食を終わらせ、鼻歌を歌いながら食器を洗っている。あれからも色々会話（試練）が襲いかかってきたため、俺は既に大分疲れている。元々本調子では無い訳だし

かなり気分的にだらけながらも新聞を読んでいると、台所からの水音が止まるのが聞こえた。無事食器洗浄を終えた少女が手を拭きな

がら話しかけてくる

「それじゃあ、準備してくるからちょっと待っててなの!」

「……………」

もはや色々諦めたが、最後の抵抗として無言のまま「さっさと行つてこい」と手でジェスチャーのみの返事をする

だがそんな抵抗も少女の前には無意味。少女は反応が帰ってくるだけで嬉しいのか、にへらーと笑うとそのまま二階に上がっていった

「……………最近の子供は<sup>ガキ</sup>どうなってるんだ」

思わず愚痴が漏れる。普通これだけ邪険に扱えば、あそこまで無邪気に居られないと思うのだが

(場所さえ教えてもらえば、一人で勝手に行くんだがな……………)

そっちのほうが気楽で手早く済むから俺としてはそっちのほうがいや、そうなると魔力を分けて貰えないから無理か

結局選択肢など無いのか……………そんな事を考えているとセンサーに反

応が有った。何か、というよりも誰かが近づいてくる……さっきまで道場に居た奴か

俺の姿を見られるとおそらく色々面倒な事になるので、待機モードに戻っておく。勿論その時に俺が居たという痕跡を消すのを忘れな。まあ元々消すような痕跡もあまりないのだが……それでもなかなか際どいタイミングで、リビングと廊下を繋ぐ扉が開かれると一人の青年が入ってくる

年齢はおそらく15〜17歳ぐらいか。髪の色は黒。背は高く、体軀も余計な肉がついてない引き締まった体……そう、まるでその道の人の様な鍛えられた体をしている

だが何よりも気になるのはその目。まるで周りが見えていないかのようななどんよりとした目をしている癖、異様なほどギラギラとしていて……鬼気迫るような、まるで追い詰められているような印象を受ける

足取り荒く奴（青年）は冷蔵庫へ向かうと、中から飲料水を取り出して飲み始める。そこへ準備を終えた少女がリビングへと戻ってきた笑顔でスキップでもしそうなほどテンションが高かった少女が、冷蔵庫の前に居る青年の姿を見て体を強張らせる。それと同時に青年も少女を認識したのか、そちらに視線を向けると

「……なのはか。俺はこれから外出するが、ちゃんと留守番してるんだぞ」

「…え？ あ、お、お兄」

そんな事を一方的に告げ、リビングから出て行った

しん、と静まり返るリビングに、玄関の扉の開閉音がやたらと響く  
とりあえず待機モードを解除して人型に戻り、固まったままの少女  
に視線を向けてみる……先ほどまでとは打って変わり、重い空気を  
纏い顔を伏せたまま動かない少女がそこにいた

(………思ってたより“高町家の家庭の事情”ってのは複雑なのかも  
な)

思わず溜息が出る。面倒だという事と、相変わらず関係ない事柄を  
考えてしまったという二重の意味の溜息

(まあとりあえず、だ……こいつ、どうすればいいんだ?)

動かない少女を前に、俺は途方に暮れるのだった

第四話 『昔の記憶と家庭の事情』前編』 (後書き)

後編へ続きます

第五話 『昔の記憶と家庭の事情』後編』 (前書き)

後編になります

それではどうぞ

第五話 『昔の記憶と家庭の事情』後編』

あれから、少女をなんとか再起動させて公園に案内してもらいベンチに座ったのはいいのだが、特に何もすることが無かった為時間だけが過ぎて行き

(で、現在に至る……と)

回想が終わり、改めて現状を再確認……俺としてはこのままでも魔力供給という目的は果たせるわけだが

しかし、つい3時間程前まではへらへらしていた少女がこうも沈んでいるというのはなんといいのか…そう、居心地が悪いというか

辺りは冬特有の寒気に包まれてはいるものの、雲一つない快晴で太陽の直射日光が降り注いでいるためそこまで体感温度は寒くない

空気も澄んでいて、近くに海でもあるのか、独特の匂いが風と一緒に流れてくる

とても恵まれた条件、なのだが。少女が暗めのオーラを発しているため安らいでいるとは言い難い状況である



(それにしても、奴……こいつの兄はなんのつもりだ?)

少女が兄と言い掛けていたからおそらくはそうなのだろう。だが少なくともあれは家族間で交わされる会話ではなかったように感じた少女に一方的に告げ、少女が話そうとしているのを聞こうともせず

(いや、あれは“聞こえてなかった”のか?)

ふと、そんな考えが浮かんできた。だが確かに、思い出してみれば奴の様子はどこがおかしかった様にも思う。特にあの目が

あの妙にギラついた目が平常だというならそれまでだが……いや、それはそれで危ない人になるわけだが

それに奴ばかりに気を取られてはいたが、少女の様子もおかしかったと思う

兄を見て体を強張らせるといふのは一般的な反応とは言えないまさか奴にナニカされたのか?

そんな変な方向に思考が向かいかけた時、今までほとんど動きがなかった少女が身動きをしたのを感じ意識が少女へと向かう

少女の目が、膝の上にある俺をじっと見ていた。暫くの間そのままの時間が過ぎて、少女が口を開く

「家に居た男の人……わたしのお兄ちゃんだけだね。ほんとはすごく優しいの」

唐突に喋り始める少女に驚くが、それ以上にその言葉に驚きを感じる

「昔は、わたしが何かしようとする度に「大丈夫か？」」「無茶はするなよ。なのは」っていつつも気に掛けてくれて」

どんくさいからわたし　少女が苦笑しながら語る。今朝見た様子からでは想像できない、少女の兄の姿を

「結局何か失敗しちゃっても、何よりも先にわたしの事を心配してくれて……その後、「仕方が無いな」って言いつつ、手伝ってくれるの」

少女の指が俺の身体　その中心にある銀色の球体　に触れ、そのまま優しく撫でる様に動かしてくる

「わたしが無茶しちゃったら凄く怒るの。怖いけど、でもその後優しく抱きしめてくれるの……」「心配したんだぞ」って」

聞いている。と返事をする代わりに少女が触れる球体を発光させる。それを見て少女は嬉しそうに目を細める

「お兄ちゃんだけじゃない……お父さんも、お母さんも、お姉ちゃんも……みんな、いつもわたしのこと……」

家族のことが大好きなのだろう。兄をはじめ、家族のことを語る少女の様子は自慢げであり、誇らしげでもあった

いい家族なんだな　その言葉は声に発する事なく胸中に消える。もしかしたら俺は、少女に嫉妬していたのかもしれない

(子供に嫉妬する　か、俺もまだまだ子供ってことか)

嫉妬をしてももつどうにもならない。どうにかなる事でもない

確かに俺の家族、と呼ぶべき者は少女のそれと比べるまでもなく歪で、冷たく……最低の部類なのかも知れない。いや、家族と表現するのがそもそも間違っているのか

それでも俺は、あの頃は幸せだったと思う。少なくとも四六時中誰かに、何かに襲われる心配などせず、与えられるままに、求められるままに、ただ日々を過ごしていたあの頃は幸せだったと、思う

だが、こうやって比較対象があるとどうしても

少女が話す、家族の自慢は止まる事は無い。それだけでこの少女がどれだけ愛されているのかが分かる、気がする

親の愛、というものがどういふものなのか。知識としてはあっても実感したことは無いため、あくまでも予想に過ぎないが

ふと、聞こえていた声が止まる。再びその顔が沈んだものになり、俯く少女

「……でも、お父さんが倒れて全部変わっちゃった」

口から飛び出てきたのはそんな言葉。悲しそうな、辛そうなそんな声

「最初はみんないつも通りに・・・完全には無理だけど、それでもいつも通りに過ごそうとしてたの。過ごそうと、頑張ってたの」

「・・・」

「でも無理だったの。当たり前だよね…大好きな家族が、一人居なくなっちゃったんだもん」

『死んだ、というわけじゃないのだから』

「そう、だね…そうだけど……」

思いのほか冷たい声が出た。それを感じ取ったのか少女は少し驚くように体を震わせる

(嫉妬の次は八つ当たりか？情けないにもほどがあるな……本当に)

そんな自分を情けなく思うと同時に違和感を感じる……俺はこんな風に感情を出す様な性格だっただろうか、と

自分自身に戸惑っていると、少女が再び喋りだす。先程よりゆっくりと

「…それでも、そこ居るのが当たり前で、居て欲しいと思う大切な人……そんな人と喋れないのはとても悲しいの。抱きついたりできないのは、とても、寂しいの……」

最後の方は絞り出す様な声で。少女は手で撫でていた“俺”を顔の近くに持ってくる

「ギン君も…大切な人が喋れなかったり、触れることができなくなったりしたら……寂しいと思わない？」

「……」

そう、語りかけてくる少女に対して俺は何も答えられない

大切だった人は、もう居ない。大切だと思っていた人も、もう居ない。それに対して俺は悲しいと、寂しいと思ったことはあるだろうか？

ある、とは思う。でも今はもう

(兄ちゃん！)

久しぶりに思い出すその声。それはとても懐かしくて、とても

「ギン君？」

『…そうだな、きっと……』

そうだと、思う

それから少女は暫く喋り続けた。母と、姉と段々会話する機会が無くなっていった事。兄の態度が段々変わっていった事。家族の顔を見る事すら無くなっていった事。一人に、なった事

それは少女が受け入れるにはあまりにも辛い日常

「辛いのは、悲しいのはみんな同じ。だから我慢してたの。ほんとはお店のお手伝いとかしたかったけど、わたしが居ても邪魔になるだけだから」

撫でる手が止まる

「わたしにできるのは、手の掛らない様、誰にも迷惑かけないように、いい子でいる事」

それは少女の年齢からすればあまりにも大人びた、過ぎた考え方で

「それでもね。やっぱり辛くて」

手が震える

「どっつしても、悲しくて」

滴が落ちて、弾ける。銀色の球体が濡れて、光る

「どっしりよつもなく……寂しいの」

小さい、本当に小さい嗚咽が聞こえる。それは少女がするには悲しすぎる泣き方だった

「やっぱり、我慢、できないよ……辛くて、悲しくて……寂しいのはいやだよお……っ」

『……そうか』

やっと理解する。少女が俺を受け入れた理由

ただ、寂しかったのだろう

それは少女の年齢を考えれば仕方ない事だ

誰も居ない家で一人過ごす

誰とも会えない、誰とも喋る事は無い

そんな日々が嫌で、異端の得体の知れない俺を受け入れた……それは、藁



にも縋るといった気分だったのだろう

(だが、俺は藁にはなれない)

俺に縋依存させるらせる訳にはいかない。俺は遠くない日に、ここから居なくなる予定のモノだ

それに俺は藁ではない……少女がきつと求めている家日族との平和な日々を壊す可能性のある爆弾

爆発すれば最後、少女が望むものは壊れて、無くなってしまうかもしれない。そんな事になれば少女がどれだけ

(いや、違う)

違う……そう、違う。俺は、俺が心配なのは、俺が嫌なのは

実際にそうなる事で、少女に嫌われる事。俺を見る、その優しい目が憎悪に染まる事に耐えられないだけ

ただ、俺が怖いだけ

現在時刻は正午過ぎ。あの後泣き止み、落ち着いた少女が恥ずかしげに謝ってきた直後の事

少女のお腹がくうーっと可愛らしくもよく響く音を立ててなっため、昼ご飯にしようとの事で公園を出ることになった

真っ直ぐ延びる道路、その脇にある歩道を真っ赤になりつつも歩きながら少女は目的地を目指している。俺はそんな彼女の胸ポケットに入れられているわけだが……

「うゝ……あつ　にゃぷいっ!？」

ああまたか。ビターン、と痛そうな音と珍妙な悲鳴発しつつ少女が倒れる。これで通算5回目といった所か

これはもう運動神経が悪いというレベルでは無いような。そんな事を思いつつ、周囲の様子を伺う。レーダーによる探敵辺りに人が居ない事を確認してから人型に戻ると

「掴まれ」

そう言って少女に手を差し出す。少女はその手を暫くの間ぼけーっ  
と見た後

「あ、ありがとう……」

そう言っ**て**ぶっつけて赤くな**った**顔を更**に**赤くしながら差し出した手を取る。恥ずかしいのは分かるが、我慢してもらっ**う**しかない

「ううー」

そう唸り**つつ**顔を擦**っ**ているが、括**つ**た髪**の**先**に**付**いた**ゴミ**が**取**れ**て**い**ない。溜息を吐き**つつ**それを摘み、たまたま近く**にあ**った**ゴミ**箱：ゴミ箱？に捨てる。ちなみにやけにでかくて曜日**が**どうだの、分別**が**どうの**こ**うの**と**書いて**あ**った**が**それはスルー**し**た

「あ、ありがとうギン君」

どういた**し**まして。と言**う**代**わり**に手**を**ひら**ひ**ら**さ**せ、そのま**ま**その手**を**少女**へ**と差**し**出**す**。暫く意味**が**解**ら**な**か**った**の**か、首**を**傾**げ**て見て**い**た**が**

「……え？ えええっ!？」

理解**し**た**の**か、再**び**顔**を**赤く**し**て驚**い**た声**を**出**す**

「「」でもしないと何時まで経っても目的地に付かないだろうからな。さっさと行くぞ」

「あう……え、えーっと、じゃあ……」

恐る恐るといった感じで手を重ねてくる少女。そのままゆっくり、できるだけしっかりと握り歩き出す

「わっ、わっ！ い、いきなり歩き出すとびっくりするの！-」

「そうか」

「むー！ ……でも、えへへ……」

顔を後に向けず歩き続ける俺と、後ろから少し嬉しそうな声を出しつつ付いてくる少女

相変わらず単純というのか、何というのか……

そのまま歩き始めて5分くらい経った。辺りの景色から今歩いているところはおそらく住宅街か

様々な家が立ち並んでいる景色はある意味壮観とでも言うのだろうか。よくもまあここまで密集するものだ。といった気持ちの方が大きい気もする

(…ん?)

ふと視線を感じ、辺りを確認…判明

主婦然とした女性達のグループ。恐らく立ち話でもしていたのだろうか？ それがこちらに視線を向けている

それはまるで微笑ましいものを見るような、そんな視線。「若いっていいわねー」なんて声も聞こえてくる

少女の手から伝わる体温が若干上昇、おそらくは恥ずかしいのだろう。とりあえず……

「……」

そのグループの方向を見る、戸惑う雰囲気が伝わる。目を細めこちらに向けていた視線が別方向へと散る

先程とは違い、こちらを見る事なくグループが縮こまってひそひそ喋っている。「最近の若い子って怖いよねー」なんて声が聞こえたが無視。そのままグループの横を通り過ぎて行く

「あ、ありがとなの……」

暫くした後、後ろの少女が何か言っていた気もするが、よく聞こえなかった。気がする。

「あ、ここだよ！」

更に歩くこと4分39秒29……無駄に細かく数えていた自分の頭を左右に軽く振ることです。まあともかくとして、少女の声が聞こえたので足を止め、その目的地を

「……………なんだここ？」

「あれ？ ギン君コンビニ知らないの？」

「コンビニ？ ここがああコンビニ？」

遠目に見ても分かる豊富な品揃え。雑誌、飲料水に弁当、後は文房具……は、まあ解るのだが。何か、見たことないような物が沢山ある様に見えるのだが……気のせいだろうか？

そう考えつつも店内に入ると来客を知らせるチャイムと同時に、やる気があるような無いような声で「いらっしやいませー」と声が聞こえる

「じゃあわたし選んでくるの。　ギン君も何か欲しい物あったら言  
ってね」

お金は余裕あるから。と言って少女が歩いて　行く途中こけそう  
になりつつ食料品が置いてあるコーナーに消える

(……まあ、大丈夫だろ)

そう思うことにして、改めて辺りを見回す……やはり前に見た時と  
大分変わっている気がする

少なくとも、俺が今立っている場所に置いてある、これは……裏面  
を見ると、トレーディングカードゲームと小さく書いてある。何だ  
それは…交換するためのカード？　こういった物はおいてなかった  
気がするのだが

(ふむ、まあ世界が違うからそういう事もあるか)

そう結論付け、自分用の食糧を探すために先程少女が消えたコーナ

ーに足を向ける

朝は一人分しか無かった為遠慮したが、食べることにより多少なりともエネルギーの足しにはできる。まあ、食べないよりはマシ、程度ではあるが

まず目に映るのはオニギリなどの軽食、横に視線をずらせば各種弁当。更に横にはデザート…デザート？

(ケーキもあるのか…？この世界のコンビニは品揃え豊富だな)

感心しつつも目の前に置かれた苺のショートケーキをじつと見る。

正直甘い物は嫌いではないが……値段を見る。二つ入りで約350円か

量、質に対して値段が釣り合っているのかいないのか。それすら解らないがとりあえずそれを手に取る。それと同時に少女が俺の姿を見つ駆け寄って　こけそうになるので支える

「あう……重ね重ねありがとなの…」

人目がある所なので余計に恥ずかしいのか、微妙に混ざったお礼をしてくるので、さっさと離れる

「どつも。ところでコレが欲しいのだが」



「ほえ？ あ、ショートケーキ！」

目がキラキラ光っているが……やはり少女も世の例に漏れず甘い物が好きなのだろう。まあ予想はできていたので、予め用意していた答えを返す

「俺は一つで十分だ。残りはお前が食うと良い」

「えっ！ ほ、ほんとに？」

無言で頷くと嬉しそうな顔をする少女　　なのだが、すぐ顔を不機嫌そうに膨らませる

「…………むっ」

「…………」

原因はなんとなく解る。名前で呼ばないのが不服なのだろう……これについては、朝食の席にて散々こねた際に言っても無駄だと理解しただろう。と勝手に解決したことにする

「お前はそれだけでいいのか？」

「え？ う、うん。あんまりお腹空いてないから」

少女の手に握られているのはサンドイッチ。野菜とチーズが挟んである簡素な物……値段を確認、125円か

お腹が空いていないというのは嘘だろう。公園ではあれだけ豪快に……は違うか。盛大に？ まあはつきりと鳴っていたのだ。となると

(気分的な問題か？)

しかしここで問い詰める必要も無いし、ショートケーキを1個あげるから問題は……無いことはないか。栄養とか足りてるのだろうか  
こいつ

少し気になったのでさり気なく、あくまで自分的にさり気なく聞いてみる

「そうか……好きなのか？」

「えっと、好きと言うより食べやすいの」

「……………毎日それなのか？」

「ううん。ちゃんと種類変えたりしてるの」

「……………夜は？」

「サンドイッチかな……………お腹減ってない時は何にも食べないで寝ちやうの」

「栄養足りてないのではないか？　これは」

「盛大に溜息を吐きそうになったが、なんとか我慢した」

「昼ご飯を無事購入し、高町家に戻ってくる。その途中で少女の両親が経営しているというお店　翠屋　に案内してもらい、そのまま帰ってきた」

「ギン君翠屋に入らなくてもよかったの？」

「まあ、何処にあるのか確認したかっただけ……だからな」

買ってきた昼ご飯をパクつきつつ、自然に返事してしまった自分に呆れ半分驚き半分といった気持ちになる

そっか。と言いつつ、早々に食べてしまったサンドイッチのゴミを捨てた後、ショートケーキを切り取り口に運ぶ少女。その顔が幸せそうに綻ぶ

「ん〜…美味しいの！でも、お母さんが作った方がもっと美味しいの……」

最初は嬉しそうに、最後は少し悲しげに感想を言う少女

その評価を聞いて少しだけ翠屋に入らなかった事を惜しく思ったが、とりあえずその気持ちは仕舞っておく

「お前の母親は料理が上手いのか？」

「うん！すっごく上手だよ……はふう」

思い出したのか、遠い目になりつつもふやける…いや、ふにゃける顔

「その割には、朝はここまでテンションが高くなかった様に感じたが」

「え？……えーっと、それは……」

ぼそぼそと呟く様に　いや、言葉にならない言葉を発する少女。

……朝との相違点を確認　終了

1・母の手作りご飯と、コンビニ弁当（というよりは軽食）

2・一緒に食事を食べる人の有無

3・デザートの有無

4・寝起きでテンション低かった

（……まあ、こいつの性格からして2が妥当か）

正確には食事の際の同席者及び会話の有無、と言った方がいいのだからだろうか

俺はもう慣れているが、一人で食べるという行為は多少なりとも寂しいものがある。目の前の少女なら尚の事だろう……だから、今の生活が例え仮初の物だとしても、嬉しいのだろう

そんな風に思いつつも、ショートケーキを咀嚼しつつ、思い出す一つの事

「ああ、後でPCを借りたいのだが大丈夫か？」

「ほえ？ う、うん。大丈夫だけど、何か調べるの？」

ちよつとな。と適当に返事をしつつショートケーキを食べ終わる。量産品であるうそれは、不味くはなかったとだけ言っておく

程なくして少女も食べ終わり、現在は少女の部屋で俺はPCを操作、少女は机に向かっている。おそらくは勉強か？

PCの画面が立ち上がるのを眺めつつ、調べる候補を改めて頭に思い浮かべ……どうでもいいがやけに立ち上がり早い

いや、俺が知っているそれに比べれば月とスッポンレベルくらいの差があるものの、割と色々な世界を旅した俺から見るとかなり早い部類に見えた

この世界の化学技術は結構発展してるのだろうか。そんな事を考えつつゲストのアカウントでログイン……デスクトップが表示されるインターネットに繋がっていることを確認し、目的の事柄についての検索を開始した

(まあ、こんなものか)

約30分後に検索を終了。PCをシャットダウンしつつ、少女の様子を見る　まだ勉強していたのか

集中しているのだろうか。邪魔をしては悪いので音を立てない様に部屋を出て階段を下り、リビングへと入る

とりあえず少女に飲み物でも持っていこうか？しかし人の家を勝手に探るのも……だが少女は大丈夫だよ〜って言っていたし

そうだな、とりあえずこのオレンジジュースでも持って　待てい

ああ、とりあえず待とうか俺、落ち着こう。深呼吸だ　よし、落ち着いた

(何を馴染んでるんだ俺はっ!!!)

声に出さず叫ぶ。何だ今の一連の思考は。すっかり少女の家族とまでは行かなくとも、同居人的な感じかどうかそうなんというかどうと言えはいいのか

再びこんがらがってきた頭を振り思考をリセット……完了。大丈夫

か？問題ない

微妙に大丈夫では無い気がしたが、それはこの際無視する

誰かと……他人と一緒に居るのは苦手だ。というより怖い。俺と言  
う存在がどういうモノなのか、知れば恐怖か拒絶か

だが、俺と言う存在の、ほんの一端だけとはいえ、知っても受け入  
れてくれる 正しくは絶るのだろうか 少女

ああ、解ってはいるんだ

ここは、居心地がいいのだ

久しぶりの、誰かとの食事

久しぶりの、誰かとのまともな会話

久しぶりの、誰かと過ごす日は

頭を振る。これ以上考えるなと強く言い聞かせる

どうせ長くても数日の日常。馴れてしまえば辛くなるのは自分だと

そう考えながらも冷蔵庫を背に、思わず座り込んでしまう

「ああ……くそっ」



悪態が声となって出るが、気にする余裕もない

頭を掻き篁り、俯き、呟く

「俺はこんなにも……弱かったのか」

出てきた声は、自分では信じられないほど掠れて、聞こえた

第五話 『昔の記憶と家庭の事情』後編』（後書き）

この前後で皆様の主人公へのイメージが変わるのではないかと思います…多分

さて、そろそろ始まりの章も終わりを迎え……おそらく、終わりを迎えます。ええ

予定は未定というよりは不安定なれど、最後までしっかりと書いていきたいと思しますので、よろしく願います

感想、ご意見お待ちしております。それではまた次回で

第六話 『善行と偽善と』金髪少女・前編』（前書き）

私はただの子供ではない。それは私が一番分かっていることだ

だから私は我儘を言わないようにしている。それが今の私にできる事の一つ

パパに言われるままに、習い事をした。でも言いなりだったと言っ  
わけではない

それらは将来、自分のためになると……そう思ったから積極的にした

むやみに外に出ると、色んな人に迷惑がかかることを。そして色ん  
な面倒事が起こる事を知っている。だから私は我慢する

時折、同じくらいの年代の子と一緒に走っていくのが見える時があ  
る。でも私はそれを見て羨ましいとは思わない。多分、私がそこに  
交じっても面白くないだろうし、向こうもそれは同じだろう

我儘なんて言わない。だけど、一つだけ我慢できないことがある

何度も、何度も本気で嫌がっても、パパは諦めず何度も言ってくる

ついには向こうだけで話を進めている そんな事を聞いてしまっ

た時、私は初めて外に飛び出した……いつも傍にいる執事に酷い事をして

ごめんね 声に出さず謝って私は逃げ出す。本当に嫌なんだと、訴えるように

(その結果が、これかあ……)

現在私は黒服の二人組に追われている……とても分かり易い状況だ  
おそらくは私を誘拐でもして、パパになんらかの要求でもするのだ  
ろう

ちゃんと予想できていたのに、いざとなると混乱してしまって、道の確認すら忘れて闇雲に逃げてしまう。勿論逃げ切れるわけもなく、何処かの路地裏に追い詰められてしまう

もう、逃げられない

そんな考えが私に恐怖を思い出させる……でも醜態を晒すわけには  
いかない

私はアリサ・バニングス。私にだらしなくて、無茶苦茶な事を言う  
てくることもあるけど

とても誇りに思える両親の、パパとママの娘なのだから

でも、これだけは許してほしい

今から零れ落ちる、言葉よわねだけは、どうか……

「誰か……」

助けて

声が届いたのか、そうでないのか

私の目の前、黒服の一人の上に

男の子が、降って来た

第六話 『善行と偽善と』金髪少女・前編』

「……………」

現在俺は駅前商店街、その一角に存在する喫茶『翠屋』を見ている  
中の様子を詳しく伺うことはできないが、時折少女の家族と思わし  
き人影が見える……というよりまだ

(どちらが母親だ?)

おそらく家族だと思われる候補は二人。一人は黒の いや、あれ  
は黒に近い茶か? 長い髪を一本の三つ編みにして垂らし、その  
根本をリボンで結んでいる……三つ編みおさげとでも言えばいいの  
か。そんな風体の、少女の兄に似た雰囲気を持つ女性。まだ若い……  
はつきりとは解らないが、おそらく年齢は10代か

視線を横にずらす。候補のもう一人、こちらは少女と同じく栗色の  
髪の長髪と紫の瞳が特徴的な、まるで少女をそのまま大きくしたか  
のような容姿を持つ女性。こちらも若い、前者よりも年上に見える  
事からどちらかと言えばこちらが母親だと

(……だが、若すぎないか?)

そう、遠目に見ても若い……というか若すぎる。見た目は20代に見えないことも無いが、10代と言われても違和感が無い気がする

暫くじっと見ていたが、この場で判断する事を諦める。そもそもどちらが母親だろうがこの場で知る必要はない……問題は別にある

(相当疲れてるな。あれは)

全体的にどことなく動きが鈍いのもあるが、見ているとおさげの女性にふらついたり危なげな場面も見られる

現在の時間は2時過ぎ。ピーク時は過ぎたのかどうかは分からないが、それでも時期故か忙しそうに動いているおさげの女性。もう一人、栗色の髪の女性は基本奥の方に居るのか、あまり姿を見る機会はない……おそらくは調理担当なのだろう。だが時々窓から見える姿は同じく忙しそうだった

あまりのんびりする時間は無いか。その結論を出すも立っていたビルの上、そこにあるフェンスの上から跳ぶ。眼下に広がる海鳴市の街並み。都会とまではいかない華やかさと、田舎程ではない自然その両方が在る景色。少し視線をずらせば見えるのは蒼く輝く海  
美しいと、本心から思う

暫くその景色に見惚れながら、重力に身を任せて落ちていく。地上

まで20m……15、14、13　そろそろか。視線の先に見えるのは所謂路地裏いわゆると呼ばれる場所。近づいてきた地上に叩きつけられる訳にもいかないので、空中を蹴り跳びながら勢いを殺し、着地

「ぐげえっ!？」

「なっ!？」

「…えっ!？」

少女から魔力を貰い機能回復に努めたおかげで、全機能の約2割程度回復している。2割と表すとまだまだな気もするが、最初が酷かったのだから仕方ない。まあ、先程みたいな無駄にエネルギーを消費する行為は避けるべきか。色々あつてむしろしゃしてたため、思わず現実逃避を兼ねてやってしまったが

(…………ふむ)

人目がなるべく無い場所を事前に確認してから飛び降りたため問題ないと思うが、それでも念のため辺りを確認　問題無しと判断。おそらく飛び降り中の目撃者は無い。まあ見られたとしても大抵は錯覚だと思うか、周りに言っても信じて貰えないかのどちらかなのであまり気にすることも無い



例え目の前に見知らぬ金髪少女と、それを連れ去ろうとしている黒いスーツを着た如何にも怪しげな人物がいようと、だ。どうせ子供が何を言っても大人は信じないはしない。それが「人が空から降ってきた」という突拍子も無い内容なら尚更の事。もう一方の黒スーツはそもそも、人前に堂々と出れるような人種では無いだろうし、その道のプロなら俺みたいな異常に関わろうとはしないだろう

それにしても何時までこちらを見ているのだろうか。金髪は金髪で、連れ去られるのが嫌ならば今の内にさっさと逃げれば良いものを。黒スーツも今ならば、金髪は茫然としているのだから絶好の機会だろうに……いや、俺を見ているのではなく……俺の足元？

ああ、先程の声は連れ去ろうとしていた一人の上に着地したからか。運が悪かったなこいつ。一応すまんと謝っておこう……これでよかったか？

手で十字を切り軽く祈るような仕草をした後、念のため意識を刈り取る為に蹴りつけ、頭の中から足元の黒スーツ2号の存在を消去

(さて、次は……)

未だ茫然とこちらを見る黒スーツと金髪の視線をザックリ無視して、次の目的地に行くため歩き出す。時間的にはまだ余裕があるだろうが、あまり遅くなるわけにも行かない。その後にも一応やろうと思ってる事があるので、時間に余裕があることに越したことは無い

「だからそこ、どいてくれないか？」

「……見られたからには、このまま帰すわけにはいかん」

運が悪かったな　と捻りも何もないお決まりのセリフを言いつつ  
懐から取り出す…拳銃か。この世界にもあったんだな。おお、ちゃ  
んとサイレンサーが付いてるなどの感想が湧いて出る

それにしても目撃者の消去を躊躇ためらわずにやろうとする辺り、確かに  
その道のプロなのだろうが……世の中には放っておいた方がいい場  
合もある事を知らないのだろうか

「ちょ、ちょっと！　そいつは関係ないでしょっ！」

「……」

金髪が黒スーツに向かってまたもやお決まりのセリフを吐いている  
が、そんな事黒スーツが聞くはずもなく　　とうかさっさと逃げ  
ると言いたい

面倒事に巻き込まれたか？　いや、まだ諦めない。黒スーツがこち  
らに銃を向けようと　　しているその横を歩いて通り過ぎる

「ちょ…あんだ危な」

「…逃げられるとでも」

二人の人間が何か言っている。それとほぼ同時に金属音、横目で確認。拳銃がこちらへと向けられ、引き金を引くために指を

その様子を確認しつつ、歩いている方向にある手頃なサイズの石を左足の踵で左後方 黒スーツへ向かって蹴りあげる。蹴った足はそのままに身体を後方に倒していき、その勢いに乗せるように右足を使って跳ぶ

「づうっ！ き、きさ …！？」

拳銃を持っていた手に直撃、凶器を落としながらこちらを見る黒スーツ。サングラスの向こう 見え難いが、俺を見て驚愕に染まる目が見えた。逆さまの俺の目と目が合い

「ぐあ……っ」

体を捻りつつ放った左足が、相手の首に吸い込まれる様に命中。キレイに意識を刈り取られ、そのまま崩れ落ちる男

「……っ」と

一方俺は蹴った反動を利用して、無事地面に着地する事に成功する  
そのまま手足をぶらぶらさせ、最後に首を回して状態を確認 う  
ん、問題ない……この程度の運動ならもう大丈夫か。しかし気分が  
優れなかったとはいえ確認不足が仇となった。今度からはちゃんと  
着地地点の確認を怠らない様にしないと。飛び降りる度に厄介事  
に巻き込まれては堪ったもんじゃない

そんな事を考えつつも、今度こそ目的地に向かって歩き出す。時間を喰ってしまった ああいや、それでもないか？ とにかく目指すは海鳴大学病院。少女の話によればそこに

「……はっ！？ ちよ、ちよつとあんた、待ちなさいよ！」

…まだ居たのか？ まあいいか。邪魔<sup>敵対</sup>してきた黒スーツインズ（複数形）を倒す行為が結果的に金髪を助ける結果となつたし、これで無事逃げる事ができるだろう。ああ、こういうのを一石二鳥と言ったりするのか

無駄な納得をしながら歩く。さて、ここからなら徒歩何分くらいだろうか？ 頭の中に地図を思い浮かべ海鳴大学病院までかかる時間を

「待ちなさいってえ……言ってるでしょうがあああああ！……！」

首を左に傾けると、その横を結構なスピードで通り過ぎる小さな物体……石か？ 危ないな、あの大きさとはいえ、人に当たると下手すれば血が出るぞ

「避けるんじゃないわよ！ というか無視するなあ！！ こっち向きなさいよっ！！！！」

「せめて要求は一つに絞ろう。話はそれからだ」

「えっ？ ちょ、ちょっと待ってなさい。今考え……って逃げようとするな！」

そう言つて誤魔化したと思つたのだが、金髪も思つたよりしつこいな。面倒だが、ここで無視する 石を投げつけられるなんてループはごめんだ

「わかつた解つた。逃げはしない、歩いているだけだから気にするな」

「え？……えっ！？ ちょ、まっ、今の違う、今のはなしよ！ ……  
つて、しかもそれ単なる屁理屈じゃない！」

よく屁理屈なんて言葉知ってたな。そんな風に感心しつつも俺の足は止まらず、そのまま金髪を置き去りに……いや、足音が近づいてくる。追っかけて来たのか？ 面倒な……

「……分かったわ。歩いててもいいから質問に答えなさい」

「一つだけのはずだったが」

「“要求を一つに絞ろう”よ。一つ“だけ”とは言っていなかったはずだけど？」

「……」

睨むような視線だけそちらを向けると、得意げに「ふふんっ！」と胸を反らしながら誇る？金髪娘の姿が。しかし、俺の目付きの悪さは自分でも解っている。それを受けて物怖じしないこいつは相当胆が据わってるのか、怖いもの知らずなのか

やれやれ、なんでこの世界の子供は面倒な奴ばかりなんだ……普通あんなもの見たら近づかず、逃げるなり避けるなりするのが常識だろう。俺は何か間違った事を言っているだろうか？

そんな事を考えていると後ろから何か気付いたような「あっ」という声が聞こえた

「そ、そういえば……えと、その……」

先程とは打って変わってハッキリしない物言い。まあ何を言いたいのかは大体予想が付くが

「た……た、助けて、くれてあ、あり………ありがとう」

最後の方はかなり、というか聞こえるか聞こえないかの音量だったが、無駄に高性能は聴覚はそれを聞き取る。聞き取ってしまう

「進行方向に邪魔なのが居て、それを蹴り飛ばしただけで礼を言われてもな」

「……そういう事は真実でも言わずに、黙って礼を受け取るのが社交辞令だと思っマナわよ……」

どこか呆れたような声を聴きつつ歩いていく。そろそろ路地裏を抜け表通りに出るのか、人がちらほら見え始める

「俺に社交辞令を期待されても」

「…ええ、そうだったわ。そういうのができるなら最初から無視したりしないわよね……はぁ」

溜息を吐かれてもな。金髪から見えない様に苦笑する

「まあいいわ。それより質問に答えなさい！　まず一つ目、あなた何者よ？」

「拒否権は「無いわよ」……無職で浮浪者だったが最近ヒモになった」

「うっわ最悪ねそれ……で、本当は？」

「自分でも解らん」

「何それ？　そんなに本当の事言いたくないの？」

それ以上は喋らず歩く。喋っている間に路地裏を抜けたようだ。人や自転車、車等が行き交う交差点。俺の目の前の信号が赤となったので立ち止まると、金髪も隣で立ち止まる



「……ならいいわ。次、二つ目。なんで空から落ちてきたのよ？」

「雨や雪、槍だつて普通に降るんだ。人間が一人二人落ちたところで別に不思議じゃないだろ」

「雨や雪と一緒にするなっ！ 普通槍や人間は降ってきたりしないわよー！」

「じゃあ人間じゃなかったんだろ」

「はあ？ ……あなた、真面目に答える気ある？」

ある意味では真面目に答えたんだがな。さっきのは

「俺が知るか」

「あなた以外知ってるわけないでしょうが！」

「わがまま我儘だなあ」

「~~~~~っ！！！！」

さすがに往来の場で叫ぶのはマズイと思ったのか、必死に我慢している様子が見える。今更な気もするがな…… 信号が青になったし渡るか

金髪は冗談と取ったようだが、文字通り槍が降ってくるのは見た事がある。何百、何千という数の槍が降ってくる光景は正直ぞっとするものではあるが、同時に一種の芸術性を感じるものがあつた…… あれは壮観だつたな

「……ふう、よし。三つ目の質問よ。あんた何処に向かつてるの？」

まだ質問続ける気なのか……というか、そんなこと聞いてどうするつもりなんだか。まあ隠すような事でもない、はずなので普通に答える

「海鳴大学病院」

「へえ？ どんな用があるのよ。見たところ怪我なんてしてない様に見えるけど」

「そう見えるだけで、俺の体はポドポドポロポロなんだ」

「へえ、ぜんっぜんそうは見えないけど？　というか体ぼろぼろの奴があんなオーバーヘッドキックみたいなのでできるかあ！」

「火事場の馬鹿力って奴があるだろ。多分あれだ」

「多分って何よ多分ってっ！　…というかあんたぼろぼろって言う時発音悪かったけど外人？」

「超局部的な外人も居たもんだな」

「……ああ言えばこう言っってこういう事なのかしらね……」

知らんよ。何でかボドボドって言わなければならぬ気がしたただけだ

さて、目的地に着いた訳だが……ここが海鳴大学病院か。高町家を  
始め

「海鳴市に住む者の大半、更には市外からも掛かり付けにする者も多く、丁寧なサービスや応対、整った環境など、様々な部分にて優良だと評価されている場所……それがここ、海鳴大学病院よ」

「見事な解説だことで」

「ふんつ。こんなの海鳴に住む人にとっては常識よ」

そうかもしれないが、それを小さい子供がそこまで詳しく言えるっ  
てのは中々無いと思うんだが。隣を車椅子に乗って通り過ぎて行っ  
た爺さんびつくりしていたぞ。後それを押してた看護婦も

まあいいか。ここで立ち止まっ  
ていても邪魔になるだけだしさっそ  
く病院に向かって歩き出す

「あ、ちょ、ちょっと待ちなさいよ」

まだ付いて来るのか……。何度目になるか分からないが、そんな思  
いを持ちつつも中に入ると清潔な空間と僅かな消毒液の匂いが迎え  
てくれる。ここまで大きい病院に入るのは初めてかも知れない  
そんな事を思い、辺りを見渡したくなる欲求を抑え真っ直ぐ受付へ  
と向かう

「すみません、少しいいでしょうか」

「…はい、どうぞ。本日は海鳴大学病院へどのようなご用件でしょうか」

一瞬怪訝な顔　おそらくは俺が子供だからだろう　をしたものの、営業スマイルを浮かべ受付が用件を聞いてくる

「こちらに高町士郎という男性が入院していると思うのですが、何号室か分かりますか？」

「……え？」

「……失礼ですが、高町様へどのようなご用件でしょうか」

「お見舞いです」

「高町様とどのような関係でしょうか？」

「私の父の知り合いです。前々からお世話になってたとの事で、お見舞いに行っておくと常々言われてまして。ああ、それと最近高町さんのご息女とお友達になりました、この機会に一度挨拶でもしておこうかと」

ぺらぺらと嘘の中に真実？を織り交せて喋る。誰かが言っていた気がするが、上手い嘘というのは、何割かの真実を混ぜて言うモノだとかなんとか

ちなみに金髪は最初に何か驚いた様子ではあったが、今は喋る俺を見て啞然としている。「有り得ない……」とか言っているが……まあ先程までの応対を顧みれば分らないでもないが、失礼だと思っぞ

「……お客様のお名前を伺ってもよろしいでしょうか」

……あ

「ちょっと、どうしたのよ？」

急に黙った俺を不自然に思ったのか、後ろから金髪が突っついてくる。まあ不自然に思ってるのは受付もだろうが

しかし不味いな。名前なんて考えてなかったぞ……さすがに銀だけで通じないだろうし、ましてや高町なんて名乗ったら先程までの説明に矛盾が生じる

やはり昔見て覚えただけの応対の仕方だと穴があるな……その事実を確認しつつも何か無いかと考えるが思い浮かばない。適当な名前で誤魔化すか？ しかし名前なんてどんなのが普通なのか知らない

し解らない。適当に言ったのが珍妙な名前だったとしたら……いや、そもそもこれだけセキュリティの整った所なんだ。名前から間柄等を調べる事もできるので

そんなどこまで本当か解らない様な事まで考える。簡単に言えば焦っている。しまったな、どうすれば

「……お客さ」

「バニングスよ」

「……は？」

思わず間抜けな声が出てしまった。いや、意外なところから助け舟が来たというか、なんとというか。思わず金髪、もといバニングスと名乗った娘を見てしまう

「私はアリサ・バニングス。で、こっちが……ほらっ」

「あ、ああ。ギン・バニングスだ」

つい促されるままに答えてしまう。だが効果は凄まじかった

「バニングス……！ し、失礼しました」

「いいえ、非があるのはこっちよ。私と違ってこいつ、変なところで遠慮深いというか……まあ誤解させるような態度取ってごめんなさい」

「い、いえ、滅相もございません……ええと、高町士郎様ですね。お調べ致しますので、あちらに御掛けして少々お待ちください」

「分かったわ。ほら、行くわよ」

「……ああ」

金髪      アリサ・バニングス      と一緒に待合用のソファに座り、  
一息

……癪こげだが礼を言わないといけないだろう。というか、さっきから横でオーラ出ているからな。「ほら、さっさとお礼言いなさいよ」  
的な

「すまない、助かった」



「心が籠ってないし、何より土下座が足りないわ」

「調子のんなよテメエ」

「冗談よ。ふふっ」

さつきまでの仕返し、という事だろうか。思わず別の“外交用”の言葉使いが出てしまったが、金髪は気にした様子は無い。間違いない、こいつ大物だ。色んな意味で

「……何故、助けた？」

「私の質問には真面目に答えなかったのに私には聞いてくるわけ？」

「ならいい」

「冗談よ……さつきの借り、返しただけよ」

さつきの……？ ああ、路地裏でのアレか。説明したはずだがな…

「律儀な事で」

「ふんっ……まあ、それもあるけど。高町って言ったわよね？ あんたが会いたい人の名前」

そういえば、先のやり取りで反応してたな……ということは

「知ってるのか？」

「私は直接は知らないわ。でもあんたがさっき言ってた嘘がそれよ」

「父親の、知り合いか。しかし、嘘だと解ってたのか」

「まあ、怪しかったけど最後のアレが無ければ確信はしなかったでしょうね」

ニヤニヤとしながら「まだまだだね」などと言ってくる金髪。何がまだなのかは知らないが

「仕方がないだろう。ああいった嘘を吐くのは初めてなんだ」

「初めてでアレ……？」

あんだ、いいペテン師になれるわよなんて言ってくるが、俺はそんなものなるつもりは無い。まあそれはいい

「だが、それなら判る筈だがな。俺がどれだけ胡散臭うさんくさいいか」

なのに何故助けるような真似をした？ と視線で問いかける。その視線を受け 込められた意味を理解したのか 金髪娘は横に流れた髪を手で後ろへと流すと、こちらを向き口を開く

「そうね。まあ、女の勘って所ね」

「ハッ」

「……助けて貰ってその態度取れるあんだも相当なもんよね……ま、それは私もか」

そう呟いて正面を向き、遠くを見るような、そんな目をしつつ

「まあ、私も気になったのよ」

そう、言ってくる

「それならまだ女の勘……ハッ。の方がマトモな答えだった気がするハッ」

「喧嘩売ってるの？ 喧嘩売ってるのよねあんた」

至近距離で見つめあう。いや、睨み合う俺と金髪。その空気の悪さに周りに座ってる客が引いた 気がする

「……はあ。まあでも、さっきのが本心よ。自分の親がお世話になった人なら気になっても当然でしょ？」

「……そうだとしたら尚更だな。世話になった人に胡散臭い奴を会わせようとするか？」

「ふん……確かに胡散臭いし、愛想は無いし、いい加減だし、腹立つし」

つらつらと罵詈雑言を並べる金髪。よくそこまで罵倒の言葉が湧いて出るもんだ

半分程聞き流しつつ正面に見える景色      ガラス越しの手入れされ

た自然を眺める

「ちょっと、聞いてるの？」

「ああ聞いている。枕はやっぱり低反発だな」

「……………ええ、判ってたわ。あんたがそういう奴だってことは」

「理解してくれる人が居て嬉しい限りだ」

これはある意味本心。まあ俺の実体を知れば金髪こいじつでも無理だろうが

「バニングス様。高町士郎様の部屋が判りました。こちらになります」

そう言って紙を差し出してくる看護婦、もとい受付。最近は口伝じやないのか？ と思いつつも受け取る

……………ああ、全体見取り図に印付けてくれてるのか。なるほど、これは判りやすい

「有難うございます」

礼を言いつつ立ち上がり、さっそく向かおうと歩き出し

「例え胡散臭くても、愛想悪くても、いい加減でも、腹が立つ性格でも」

金髪が何かを喋っているが、あまり気に留めず歩いていく

「それでも 悪い奴じゃないってことくらい判るわよ」

足が止まる。口元に皮肉気な笑みが浮かび、そのまま振り返ると

「お前、馬鹿だろ」

と、毒を吐く。それを

「ええそうね。私も今気付いたわ」

何故か、それを笑いながら受け取る金髪

ふん。やっぱり馬鹿だなこいつ。相変わらず毒を吐く俺

今度こそ歩いていく。あまりこの雰囲気は得意ではない……ああ、  
本当に馬鹿だな

（ 俺が ）

こつこつ事しか言えない。素直に受け取れない

どうしても警戒してしまう、臆病な、俺が

第六話 『善行と偽善と〜金髪少女・前編』 (後書き)

後編へ、続きます



第七話 『善行と偽善と』金髪少女・後編』

高町士郎の病室、その場所に印が書かれた見取り図の、おそらくコピーを見ながら歩くこと5〜6分。目的の部屋の目の前に付いた。全体見取り図があるおかげで迷うことも無く、正直凄く助かった

(……………金髪は帰ったか)

付いて来なかったという事はそういう事なのだろう。まあ借りは返したと言っていたし当たり前か。俺と一緒に居ても面白くないだろうし

……………余計な事を考えた。さて、ご対面といこうか

静かな音を立てて扉をスライドさせ、室内に入る。簡素ながら清潔な造りの室内には、カーテンが引かれたベッドと、逆にカーテンが開かれた窓

僅かな駆動音、これはエアコンだろうか。室内は暖かくも無く寒くも無い、そんな空気に包まれている。入口の近くにある棚の上には花瓶が置かれ、その中に活けられた花はまだ新しい。おそらくはこまめに見舞いに来ているのだろう

静かに扉を閉め、ベッドへと近づいていく。静かな寝息が聞こえる  
……

「失礼」

聞こえてないだろうが、一応そう断っておいてからカーテンを引く  
ベッドに横たわっている男性の姿が見えた

年齢は……解らん。若々しい外見は20代にも見えるし、どこことなく  
落ち着いた雰囲気は30代にも見える。あの（おそらくは）母親も  
そうだが、どうなってるんだろうな高町家は。まさか不老なの  
だろうか？

つまらない事を考えた頭をリセット、気分を落ち着かせ、左手で男  
性の体に触れる

（<sup>スキャン</sup>解析機能 正常稼働確認。これより男性、高町士郎の<sup>デー</sup>身体情  
報の記録を開始する）

途端、アタマに流れてくるのは膨大なデータ。高町士郎という人物  
の情報。それを全て記録、整理して必要な情報を割り出していく

（ 終了、全行程異常無し。男性への影響も皆無。解析結果……  
体に異常は見られず。再度解析開始、並びに並行しての比較作業開  
始）

再び解析しつつも、別の男性、おそらくは同じくらいの年代である人物の正常時のデータと、高町士郎のデータの比較も開始する

勿論、比べるまでも無く骨格や筋肉の付き方等、違うのは当たり前だが俺が知りたいのはそういう事ではない

高町士郎を解析したが、目に付くような異常は見られなかった、と思う。だが異常がないならばもう起きていていいはずだ。だが彼はまだ目を覚まさない。それならば別のどこか、一見では判らないようなナニカが

(……………あつた)

あつた、確かにあつた。脳の裏側。おそらくはこの世界の医療技術では見つけられなかった部分。そこにある小さな、小さな傷……………とも呼べないようなナニカ

これが原因とは限らない。まだ別の、俺にも解らない何かかも知れないが。だがもし、これが原因だとすれば

(こんな事で、人は目を覚ませなくなる……………なんて脆い)

俺みたいなモノと比べるのは間違っていると解ってはいるが……………それでも、どうしてもそう思ってしまう

しかし、困ったことになった。ここまでデリケートな部分に原因があったとは

(これは、俺の力だと……リスクが高いか)

俺が使えるのは治癒ではない。例えるなら……そう、生命力の直接照射とでも言うのか

簡単に言えば出力が強すぎる。まだ別の所ならまだしも、脳みみたいなデリケートな部分だと魔導師が使う治癒の方が、調整しやすい分適任だろう

残念ながら基本的に俺は、“俺一人”では魔法を使うことはできない。俺は使われるモノ。魔法という技術を使うには魔導師という担い手が必要になる。まあ俺の場合は別の理由もあり、一人では魔法が使えないのだが……

(魔導師 か)

俺が知る限り適任が一人、だがそれでは意味が無い。それでは本末転倒もいいところだ……いや、ミイラ取りがミイラになる、だろうか？ 上手い例えが見つからないが、言葉遊びしている場合でも

「あんだ、何してんの？」

「 ! 」

そんな声が聞こえた。いつの間にか金髪がこの部屋に入ってきていたらしい。やれやれ、作業に集中しすぎて気づかなかったのか？

迂闊だった。そう思いつつ機能停止。それと同時に淡く白銀に光っていた目が元の鈍い銀色に戻る。背を向けている形なので、金髪には見えていないだろう

「いや……特には何も」

「ふーん？ 変なの……あ、はい、これ」

そう言つて金髪が何かを手渡してくる。なんだこれは……って

「いいのか、これは？」

「権力つて有つても面倒なだけだと思つてたけど、今日初めて便利つて思えたわ」

質問の答えになつてないような答え。今俺の手元にあるのは資料

高町士郎のカルテ

「まあ見てもいいと言っなら見るか」

「そうそう、人の好意は素直に受け取っておくものよ」

深く突っ込むのも面倒なので、色々とスルーしながら備え付けの椅子に座り、カルテを

「……………何故隣に来る」

「私もまだ見てないのよ」

ここに来るまでに見れた筈だが……………ああ、うんもっ何でもいさ意識を無理矢理手元のカルテに向ける。一枚目、特に変わったことは書いてないか……………二枚目、三枚目……………は？

「うわぁ……………なにこれ、何やったらこんな事になるの？」

俺の気持ちを金髪が代弁してくれた。三枚目に書かれていた事柄

高町士郎がここに入院した直後の記録

頭部裂傷多数、並びに骨にひび有り。首の骨にひび二ヶ所。除骨、肋骨の骨折多数、胸部から腹部にかけて深い切り傷、及び腹部に深い刺し傷が複数。右腕の至る所に切り傷、及び骨折。左腕の肘から先が複雑骨折。足に いや、もういい

「満身創痍って奴か」

「……そういうレベルなのかしら、これ」

確かに、普通ではない。この傷つき方も異常だが、何より

「何でこいつ生きてるんだ……？」

「ちよっ……さすがにその物言いは失礼よっ！ ……確かに私もそう思ったけど」

後半部分は囁くような声だったが、聞こえてるぞ。お前もそう思ってる時点で同罪だ

しかしあれだ。これを見てると本当にお前は人間かと言いたくなる。先程解析した結果だが、“高町士郎の身体に特に異常は見られない”と出た

つまり……俺から見る限り、脳の裏側のアレ以外、全部完治してるという事で

「人体の神秘、ここに極まれり……とでも言えればいいのか？」

啞然としながらもそう呟き、カルテの四枚目を見る　そこには、  
7ヶ月後の高町士郎のデータ……ほぼ全快状態の

(うわーないわー)

思わず突っ込む、心の中で。横を見ると金髪もおそらく同じ感想を抱いているであろう顔をしている。こちらの視線に気づいたのか、顔を向けてくる金髪

目と目が合う。互いの視線だけで意思疎通をするかのように。同じタイミングでカルテに戻し、一言

「ありえん／ありえないわ」

今、この瞬間(だけ)俺と金髪は心から通じ合った　気がする



「で？」

「……何が、“で？”なんだ？」

あの後落ち着くまで10分程の時間を要したが、どうにか平静を取り戻した俺達は病院を出てすぐの場所に立っている。現時刻は16時前後。遠くの空は若干オレンジ色になっているのが見える……さすが季節が冬なだけあって、日が落ちるのが早いな

高町士郎の現在の状況の確認と、その状況の原因であろうモノ。知りたかった情報は手に入ったものの、それを解決する手段が思い浮かばない

どうしたものか、と悩んでいると金髪が話しかけてきた。そんな現在の状況

「結局、何がしたかったのよ？ 嘘までついて……高町さんだった？ に会って。おまけにカルテまで持ち出すし」

「カルテを持ち出したのはお前だった気がするが」

そうだったっけ？　なんてとぼける金髪はほっついて考える……別の魔導師を探す？　そんなもの、この世界で見つかる可能性がどれだけあるというのか。そもそも居たとしても、探すのにどれだけ時間が掛るか分かったものではない

「ちょっと、質問に答えなさいよ。　私に恩あるでしょうがっ！」

「名前の事は路地裏の借りを返すためとか言っていなかった？」

「名前の事じゃないわよ！　カルテの事よカ・ル・テ！」

「勝手に持ってきて恩きせるのか……？」

「何よー！　あんたも見てたじゃないっ！」

ぎゃあぎゃああとやかましいが、適当にあしらいつつ考える……駄目だ。どれも現実味を帯びない

最終手段として俺がやる、というのはあるが……失敗した時は

（ギン君…）

憎しみに染まった少女の目、それが俺を貫く光景を幻視する。それだけで俺は……

「……？　ちょ、ちょっとあんた。なんて顔してんのよ！？」

「なんでも、ない」

「何でも無いって顔じゃないわよ……ってこら！　何処行くつもりよー！」

今は考えない。逃げだとは解っている。方法もおそらく一つしか無いという事も解っている。だから今は考えない

歩き出す……次の目的地に向かって。逃げるように、現実から目を逸らす様に

「もっつ！　いきなり歩き出さないでよ……」

「……お前、何時まで付いて来るきだ？」

「っつ……だ、だつて」

何か事情でもあるのかも知れないが、俺には関係ないし、興味も無い。色々助けてもらった分もあるが、路地裏の事で借りは±0

(名前の事じゃないわよ！ カルテの事よカ・ル・テ！)

……チッ

「チッ」

「いきなり舌打ち!？」

ああ、どうやら思考だけでなく行動でも表れていたのか。面倒だ

「さっさと用件をどうぞ。俺はまだ忙しいんだ」

「う…えっと…その」

無駄に？もじもじしつつ金髪娘が放った言葉は、ある意味予想の範疇を越えていた……いや、予想より低すぎたのか？

「道に迷った……?」

「そ、そうよ！ 悪いの!？」

突っかかってくるのを適当に受け流しつつ理由を聞けば、どうやら普段は車で移動しているらしく歩いてこの辺りに来るのは初めての事

何でまたそんな無計画な行動を……見たところ、この金髪は頭は悪くなさそうだが

そんな思いが視線に表れていたのか、慌てたように金髪は喋りだす

「し、仕方ないじゃない！ パパが悪いのよ、パパが!」

「なんだ、ただの親子喧嘩か」

「ただのって何よ！ 私に無理矢理お見合いしろーって言うてくるのよ!？」

後はもう、壊れた機関銃のごとく喋り続ける金髪娘。まあそのほとんどは父親への悪口だが。しかし、お見合いねえ……

「お見合いとは何だ？」

「お見合いってのは結婚を希望する者同士が、実際に会って話をしたりするのよ。要は結婚を前提にデートしましょうってことよ、多分。あんた知らないの？」

だからそんなことをお前みたいなお前が知ってる方がうんぬん。しかし人間にはそういう風習があるのか……まあそれはどうでもいい

「ところでこれ、お前の知り合いか？」

「……お嬢様、お迎えに上がりました」

「げえ！？ さ、鮫島……？」

先程から2m程離れたところに止まったリムジン……リムジンだよな、あれ。実際に見たのは初めてだが。その傍に佇んで油断なくこちらを見つつ、いや、睨みつつ話しかけてくる老紳士

(いや、執事か?)

確かあの服はそう呼ばれる類のものだった筈。しかし凄く睨んでるが……ああ、俺を警戒してるのか?

「……鮫島、こいつは一応、一応私の恩人だから」

そんな態度は失礼よ。なんて言ってるがお前が一番失礼だと言いたい。まあ面倒な事になるのが目に見えているので言いはしないが

「……失礼致しました。私、わたくしバニングス家にお仕えしております、執事の鮫島と言います。鮫島とお呼びください」

「……銀、です」

丁寧な言葉使いに思わず名乗りつつ、鮫島という名前らしい執事を見る

白髪を丁寧にオールバックにしており、口元に蓄えられたお洒落なひげと相まってどこことなくダンディズムを感じる

目元に刻まれた皺等からそれなりの年なのだと思うが、その立ち姿に隙は無い。まあお嬢様の執事だ、只者ではないのだろう

そんな風に思っていると、金髪が小声で話しかけてくる

「へえ、ギンって本名だったのね」

「それがどうかしたか？」

別に〜と返しながらも執事の方へと向かう金髪。まあ本名と言ってもソレ、今日の朝に付けられた名前だがな　そう思いつつ声に出さずくっくつと笑う

ああ、それにしてもやっと解放されるのか

「それにしても鮫島、よく抜け出せたわね？」

「お嬢様、さすがにワイヤーや虎ばさみ、トリモチはやり過ぎかと」

……何やってんだこいつ。まあこの執事の追跡を許さないため、もしくは逃げるための時間稼ぎだったのだろうか

しかしその結果が路地裏のアレとは……頭良いと思っていたが、本当は馬鹿なのかもしれない

「それではギン様、失礼致します」



「……まあ一応、お礼だけ言っとくわ」

そんな声を聴きながら歩いていき、二人の傍を通り過ぎ様

「それはどうも……今度は護衛の一人や二人、付けとくことをお勧めするぞ」

最後の方は金髪だけに聞こえるように、小声で忠告しておく。後ろから「う、うるさいわよ馬鹿っ！」なんて声が聞こえたがもう振り向かない

なんだかんだで結局時間を喰ってしまったか。そんな事を思いつつ目的地に向かう。それにしても

(……喋ったなあ)

あの少女、高町なのはとの会話でも同じような事を思ったが、あの金髪少女……確かアリサ・バニングスだったか。あいつとはそれ以上だ

あの性格故か、はたまた別の理由か。余計な気を使わないでいい分気が緩んで

(ああ、本当にもう時間が無い)

ここは、この世界は居心地が良すぎる。高町なのはに、アリサ・バニングス。俺の異常性の一端を知りつつも拒絶しない人間。ただそういう人間が今までに居なかった訳では無い。だが結局は　だからこそ余計に、全てを知られたときに拒絶されるのがたまらなく、恐ろしい

そうと分かっているのに、何度も、もしかしたら……なんて思ってしまう俺の弱さに苦笑いしか出ない

(俺がもし普通の人間だったなら……あいつとはいい“友達”という奴になれたかも、なあ)

ほら、まただ。そんな、どうしようもない事を考えてしまう。それほどまでに“楽しかった”のかもしれない……誰かと会話するとう事が

何で俺は……こんなに中途半端なのだろうか。デバイスとして生きれたのなら。人として生きていたのならどれだけ

(幸せだった……のだろうか)

夕日が目に染みる。思わず目を瞑るが、涙が出ることは無い。人間

ではないから

夕日に染まる美しい街並み。そこを歩いていく人の波に紛れて、歩いていく

そこに居る俺は、周りから見れば 人間に見えるのだろうか？

第七話 『善行と偽善と』金髪少女・後編』（後書き）

車の振動が心地よい。もしかしたら私は疲れているのかもしれない……ちよっとだけうつらうつらとしてしまっ

「お嬢様、遠慮なさらずお眠り下さい……着きましたらお伝え致します故」

鮫島がそう言ってくるが、私は今は眠りたくない気分なので、遠慮しておこう

「大丈夫よ……」

「左様で御座いますか」

「ええ……それにしても」

声に出さずふふっと笑ってしまう。思い出すのはあいつの事

空から降って来た男の子……というよりも変人

無愛想なのだか律儀なのだか。こっちが勝手に質問してるのだから、あんな嫌そうな顔するくらいなら無視してしまえばいいのに……

目付き悪いし、無表情だから無駄に怖い印象を受けるけど、嘘に失敗した時のあの慌てた顔見たら、怖いというよりも背伸びしている子供って印象を受けた

（背伸びしている子供…か。私も人の事言えないのかな）

無理をしているという訳ではないけど、それが本当の私という訳でもない

それが私の一面であるし、隙を見せないため大人びた対応を取ることが多い

ああ、そう考えるとあいつと話してた時は久々にソレが無かった…気がする。まあ、完全に、という訳でもないが

ああ、そうか……

（楽しかった、なあ）

楽しかったんだ、私

久々に、割と本音で話したからかな？

まあでも、あんな対応されたら、態々大人びた対応をするのも馬鹿らしい

（それが吉と出た　　ってことなのかしらね？）

答えは返ってこない。あいつならどう返してくるだろうか？

あの変な奴……確か名前は

ギン

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6370x/>

---

魔法少女リリカルなのは×Silver eyes

2011年10月26日06時13分発行